

325

276



始



325-276



海軍中將佐藤鐵太郎述

日本國體と曰蓮主義

東京博文館藏版

大正
7. 2. 14
内交

緒言

日蓮上人我が日本國を讚歎して曰く「我が日本國は一閻浮提の内、月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも越えたる國ぞかし」と。然らば何故に日本國は爾く超勝の國なる乎。その理由に大なるもの二あり。一には日本國自體が無上尊嚴なる事、二には絶對無二の法幢此國に建立さるゝ事是なり。

一、日本國自體の無上尊嚴なるは如何なる理由に依る乎。一には國體の素質麗明にして健全なる事、二には建國以來生動する史實のこれを證する事是なり。我國體の素質麗明健全なりとの意義より云はゞ、抑も宇宙大元の神聖は三體即一にして造化の元靈にます是れ天地初發の相貌なり。陰陽の二神は修理固成して化作の司首たり。而して統を上天に享け徳を下地に布き畏くも光華明彩にして六合に照徹すること天日の如き、女相男性の御神之れを名けて天照大神と

申し奉る、この御神は宇宙太靈の精粹にして地上蒼生の間に應現し給ひ幽明二界と時空二間とを貫串して耀きまします皇神なり、されば這を産みませし二柱神も口を極めて讚歎して曰く「靈異の兒」又曰く「珍に美し」又曰く「阿奈尊貴」と、是れ諸神を代表したる讚嘆の辭にして人衆の等しく崇仰して天祖皇祖と敬稱し奉る所以なり、實にこの大御神は宇宙の綜統神、本有最尊の實體にましますなり。而してこの御神は特に我日本國を相し給ひ萬邦の中核精美の靈土としてみそなはし、皇孫の尊を天降し給ふ、時に三種の神器を授け勅して曰く「葦原の千五百秋の瑞穂の國は是吾子孫の王たるべきの地なり宜しく爾皇孫就て治らせ寶祚の隆へ當に天壤のむた窮りなかるべし」と、かくて神皇の天統自ら彰明にして、皇室は則ち萬家の中心蒼生の統君にして、君臣の道於是乎定り、國親國子の義亦明かなり。是れ我日本國が萬國に類を絶する所以にして、若し世界萬國々民にして斯の深義を知るを得ば萬國歡喜して日本國に崇朝し、世界人

衆は咸天祖大神の神奇なるを知り、世界は一視同仁なる尤慈大悲の下に住する兄弟姉妹の心を生じ、茲に所謂世界の大平和を湧出し、嫡庶の分自ら明にして萬類等しく惠日の慈光に浴することを得ん。要するに我日本國の大君は主師親の三徳を兼具して萬邦に臨監せらるべき天統の君主にましまし我等國民は天約のオホンダカラ（大寶の義約して百姓）にして忠臣なり孝子なるべき身たり、而して後舜倫斯中より起こりて法道秩序整然として箇中に存す、是れ實に萬國の國情變轉するも我國は嚴として山岳の巍峨として驚げず崩れざるが如く、萬邦滅亡するも我國は峻然として無終に永續すべき所以なり。若し夫れ假りに我國の滅亡を憶はゞ世界の道德中心の顯證は倒れ人類永存の意義と幸福とは俱に亡びん、天地に聖あり宇宙に理あらば奚ぞ之れを亡ぼし給ふべきの理あらんや。予が我國主體の無上尊嚴なるを信じてこれを讚歎するは是れが爲なり。

更に進で我肇國以來の史實を稽るに在昔神武天皇皇祖の遺訓を紹きて大八洲

を統一し治國の大猷を決したまふや天日嗣の高御位いやに彌尊く、皇統連綿として稜威八紘に輝き神代ながらの理想悉く實現し靈鏡の清光眞澄みに澄みて穢翳なく、上下常に愛慕して天風地熱と相應す。時に臣權誇張し外寇來りて邊疆を壓することありしも神威赫灼毫末汚辱を殘さず、崇嚴の威年と俱に進み忠君の精神事に觸れて振興するのみ。かくて外來の思想矯激の邪義時に或は輸入すと雖も、祖憲の大包含力と強咀嚼力とは精美を容れて粗惡を捨て毒を變じて藥となし、悉く大樹の肥料となりて更に國體の精華を發揮し内には根柢を深くし外には枝葉を繁くし一系の皇統に徳香の益々冥薰するを看るは實に無上の幸慶と謂ふべきなり。

如上は我國體の無上尊嚴なる所以を説くこと譬へば蒼海の一滴に過ぎずと雖も望むらくは神威を感じ人心を正うするに足らむ歟。

二、絶對無二の法幢此國に建立せらるべしとは何の意義を謂ふ乎。眞の宗教

の建立是なり、法華經の眞實義開顯は即ち是なり。法華經は佛教の心髓、佛教は各宗教の權威なり。法華經の眞實義開顯とは此に久遠實成主師親三徳一具の本佛あり、大慈大悲の御手常に生物萬類の上に垂れ呼で悉く吾子と曰ひ給ふ、其壽は無始無終、其體は天地宇宙に遍滿し、變應六或にして隨誼方便の教示自在なり、力用十方に活動して透徹す。今を去ること三千年印度の大陸に降誕ましまし而も久遠の幽玄に通融し給ふ、即是れ歴史的の佛陀にして又是れ教理的の大佛陀なり、之を三身即一の應身、本有常住尊無過上の覺者となし常我淨樂の境界を證すとす。このみ佛因果の本法と共にましまして三輪自在、一切の生屬を救濟する爲に最後最尊の大法を述べ給ふもの之を法華經となす、其經中の眞實義は實に一切の救濟（二乗作佛等）本佛の示指（久遠實成）にして、其の眞意は如來の佛識佛勅として我日本國に發現すべきものとす、則ち資材を西方の印度より供して、これを東方日本の地に薰發せしめ更に轉じて西方に展向せしむるに

あるなり、而して此識に當るもの實に日蓮上人なりとす、是れ經中に摘識せる上行菩薩の再誕なればなり。上人先づ三秘五綱を提示して獅吼し佛教の統一を叫ぶ、後人之を日蓮主義と稱して弘傳す。其細を詳にせんと欲するものは親しく上人の遺書及び良師に學ばずんば俄に罄す能はずと雖も、上人が佛教最大最妙の核を掴んで人類精神の歸一を呼び日本國家の精華と併せ弘布して世界に大平和を築かんとせられたる大理想大努力に感激せざるものは未だ語るに足らざるなり。殊に上人が、其原を印度に發すと雖も日本を以て妙法の實現土なりと觀破せられたるは實に未前の大見識なりと謂ふべし。上人曰く『一閻浮提第一の本尊此の國に立つべし』又曰く『佛法必ず東土の日本より出づべきなり』又曰く『日本一洲は印度震旦にも似す一向純圓の機なり』と、しかも之等の聖語は枚擧に遑あらざるなり。

佐藤中將閣下の熱烈なる日蓮主義者たることは人の知る所なり。閣下事に觸

れ時に遭ひて講演せられたるもの數年に亘りて數百回、中にも我國體の本源を究めて國民の自覺を叫び、上人の法義を盡して歸所の正信を唱へらるゝを見るに、何れか誠忠熱烈の語ならざる何れか精到切實の説ならざる、今や古今未曾有の世界の大動亂あり人心漸く不安にして據る處に迷はんとす、斯時に當つて一大警鐘を強打して彼等の耳朶を衝き彼等の覺醒を促さずんば、天統天立の國も時に人造已作の醜汚に染み欣んで彼等の后塵を拜して其の餘臭を嗅ぐの輩を出さんやも計りがたし。其講演中選し編して乃ち強て閣下の允諾を得、刊行して敢て世に出せり、亦以て打鐘の一槌撞ならざらんや、聊か予が所感を述べ併せて此書を刊行するの理由を明にす

大正六年臘月

編者 松尾鼓城謹識

日本國體と日蓮主義

目次

緒言

我日蓮主義

一 間違つた解釋……………	一
二 釋迦に對する觀念……………	三
三 譽の感じと宗教……………	三
四 現實的活動と日蓮主義……………	五
五 釋迦の蛇の譚と露西亞の現状……………	六
六 大義名分を明に……………	七
七 我日蓮主義……………	八

目次

思想の選擇と日蓮上人の教訓

- 一 梅香より受けたる教訓……………10
- 二 ドラゴミロフ將軍の訓誡と日蓮上人の教訓……………11
- 三 日蓮上人の教訓の二……………18
- 四 日本に禁物の思想……………23

國家と軍人と日蓮上人

- 一 予が國家觀と法華經……………26
- 二 國家成立の性質と其の選擇……………27
- 三 我帝國と法華經……………29
- 四 統一能化の天職を全うする國家……………30
- 五 統一的國家と法華經の流通……………31
- 六 日蓮上人は國體觀念の中興論者なり……………33
- 七 國家的日蓮主義……………36
- 八 日蓮主義と誤れる論者……………38
- 九 斯の主義と斯の帝國との相助……………39

- 一〇 上人の大勤王心……………40
- 一一 上人の情愛……………43
- 一二 上人の正直……………44
- 一三 上人の剛健、大義名分、孝養……………45
- 一四 上人の教と軍人……………47

天來的日本の國體と日本民族の天職

- 一 國家の成立と民主的統領……………48
- 二 天地本來の國家の理と唯我一人の如來……………53
- 三 我國と國家主義の理想……………56
- 四 諸外國に建國の理想ありや……………65
- 五 根柢深く而も尊嚴なる我國體……………68
- 六 天立天統にして神聖なる君主……………75
- 七 我國民の資格……………81
- 八 外來思想の影響の一、儒教……………84
- 九 其二、初期渡來の佛敎……………86

一〇 其三、最澄と空海……………八八

一一 其四、念佛他力宗……………八九

一二 其五、儒佛の弊害と日蓮上人法融融合の主張……………九二

一三 消化力に富める日本……………九五

一四 我國と奉公の精神……………九六

一五 敢て稱す日本人は化學的國民なりと……………九七

一六 忠義を背後にしたる萬行……………九八

一七 國を富せよ奢りを斥けよ……………九九

一八 東西文明の融合と最後の理想の顯現……………一〇〇

神道と日蓮上人に依り開顯せられたる佛教

一 序言……………一〇一

二 予の觀たる神隨の道……………一〇二

三 佛教……………一〇三

四 法然上人布道の功罪……………一〇四

五 結論……………一〇五

自強將命と統一

一 戊申詔勅を拜す……………一〇七

二 自強將命の意義と日蓮上人の威言……………一〇八

三 劃一と統一の差異……………一一〇

四 雜然たる思想界と我國特有の風味……………一一一

五 國家と宗教と日蓮主義……………一一三

六 日蓮上人に映じたる日本國の大……………一一四

七 科學萬能の迷信に中毒せる學者……………一一五

八 宗教と道德の調和……………一一六

九 日蓮主義は厭世的にあらず……………一一七

一〇 結論……………一一八

歐洲戰亂に関する所感

一 緒言……………一二九

二 地位の競争の上より見たる獨逸と英國……………一三〇

三 戦争と準備と獨逸……………一三一

目次

四 英國の襲用的戰策……………一六三
 五 攻守の關係より眺めたる獨逸及び聯合國……………一六五
 六 注意すべき英國の意義……………一六七
 七 歴史を繰返しつゝある戰爭及び獨逸の準備……………一六九
 八 戰爭の我國に及ぼす利害……………一七〇
 九 我國の地位の向上に就て……………一七一

青島視察所感

一 幾多の英雄と山東……………一七四
 二 獨逸が青島を略取したる手段と歐洲の文明觀……………一七七
 三 同じく經營の用意と同地放棄の手段……………一八一
 四 同じく防禦設備……………一八四
 五 同じく陷落と我軍の勇敢なる奮闘……………一八六
 六 堅實なる邦人に依つて根據の實蹟を示せ……………一九一

宗教と教育の歸一

一 現代の一大缺陷……………一九六

二 教育と宗教……………一九七
 三 國家教育……………一九九
 四 國家教育の理想……………二〇一
 五 一王一佛と我が國體……………二〇三
 六 宗教の統一……………二〇七
 七 宗教と道德……………二〇九
 八 生活と宗教……………二一一
 九 千古不易の斷案……………二一三
 一〇 結論……………二一六
 一一 餘言……………二一七

國民教育及宗教に就て

一 所謂世の思想家の境界……………二一九
 二 宗教を疎外せる思想……………二二一
 三 教育家の宗教に對する態度の反省……………二二三
 四 學術の範圍を超越したる宗教……………二二六

目次

- 五 宗教の弊害と利益……………二二八
- 六 宗教的修養と教育家……………二三〇
- 七 權威ある信條……………二三二
- 八 教育と宗教と相提携して……………二四〇
- 九 主義根本を同ふするものと提携せよ……………二四二
- 一〇 弊害を除却せよ……………二四四
- 一一 水と砂糖の如き宗教と教育……………二四六
- 一二 教育家に望む……………二四九

我國固有の女性美の發揮

- 一 緒言……………二五三
- 二 偶然なるが如くにして奇なる七數と海軍……………二五三
- 三 ナポレオンの逸話と婦人の缺點……………二五五
- 四 須世理姫命の貞節……………二六〇
- 五 古代日本の女性……………二六四
- 六 浮薄なる流行病に罹るなかれ……………二六七

- 七 結言……………二七〇

身退けは名進む (道德の基礎に安定する日本婦人の美點)

- 一 東西の異なる心情……………二七三
- 二 誤れる所謂新しき婦人……………二七五
- 三 矯正すべき新婦人思想と日蓮上人の訓誡……………二七九
- 四 女子解放説と自己主義……………二八三
- 五 婦人の放縱を諷む……………二八六
- 六 虚栄心を排す……………二八七
- 七 恐れ多き御上の御謹慎……………二八九
- 八 婦人に對する批難と生命……………二九四
- 九 玉耶女經の女訓……………二九六
- 一〇 内制に忠なる婦人……………二九九
- 一一 東西婦人道德の異點と良き婦人となる心得……………三〇一

神聖なる勞働 (勞働者慰安會の席上に於て)

- 一 孟蘭盆の起源及其の意味……………三〇四
- 二 不注意の釘一本と守宮の美譚……………三〇五
- 三 神聖なる労働……………三〇六
- 四 結論……………三〇八

法華經と我等労働者 (同)

- 一 氷水よりも心の薬……………三一〇
- 二 法華經と先帝陛下……………三一一
- 三 報國恩と永久の生命……………三一二
- 四 労働者と報酬……………三一二
- 五 法華經の精神と労働者の正直な働……………三一二
- 六 神佛の御前で働くと思つて……………三二七
- 七 先帝の御勅語と良薬……………三二九

我慢が大切 (少年集會の席上にて)

- 一 少年團の創始者と少年の心願……………三二四

- 二 廣瀬中佐は天稟の勇者に非ず修養の勇者なり……………三二七
- 三 我慢の足りない水兵の實例……………三三〇
- 四 御奉公には地位を必要とせず……………三三〇

南北兩朝正閏辨

- 一 北畠親房卿の神皇正統記と日蓮上人の神國王書……………三三四
- 二 絶對無比の君主國……………三三六
- 三 本源たる天位の御繼承……………三三八
- 四 皇位御繼承の古義……………三三九
- 五 國に二王なし……………三四〇
- 六 南北二朝を言ふ是れ既に謬れり……………三四四
- 七 忠臣を忠臣とせよ逆臣を逆臣とせよ……………三四五
- 八 尊氏は逃賊なり……………三四六
- 九 南北兩朝の分立を認めず……………三四七

天日の回光を祈りつゝ海外の發展を憶ふ

目次

- 一 明治天皇陛下御遺例と臣民の恐懼…………… 三六七
- 二 俗悪なる現時思想界の潮流と陛下の御軫念…………… 三七〇
- 三 御身に御示現遊ばし給ふ詔勅と善量品の譬喩…………… 三七二
- 四 大日本として海外發展の意義…………… 三七四
- 五 世界的大國として嚴存するの必要あり…………… 三七六
- 六 海外發展と五箇の要綱…………… 三七六
- 七 海外發展と其意氣込み…………… 三七八
- 八 海外發展と國の資格…………… 三八〇
- 九 海上の横綱國…………… 三八五
- 一〇 海國日本の前途…………… 三八六
- 一一 國格の優點と民質の選擇…………… 三八八
- 一二 永住的移民としての海外發展…………… 三九〇
- 一三 同胞一心の祈願…………… 三九三
- 一四 日蓮主義の法國冥合と念佛律禪等の對國家觀…………… 三九六
- 一五 正法弘通と海外發展に處する覺悟…………… 三九八
- 一六 世界的大國を理想として見たる陸國海國…………… 四〇〇

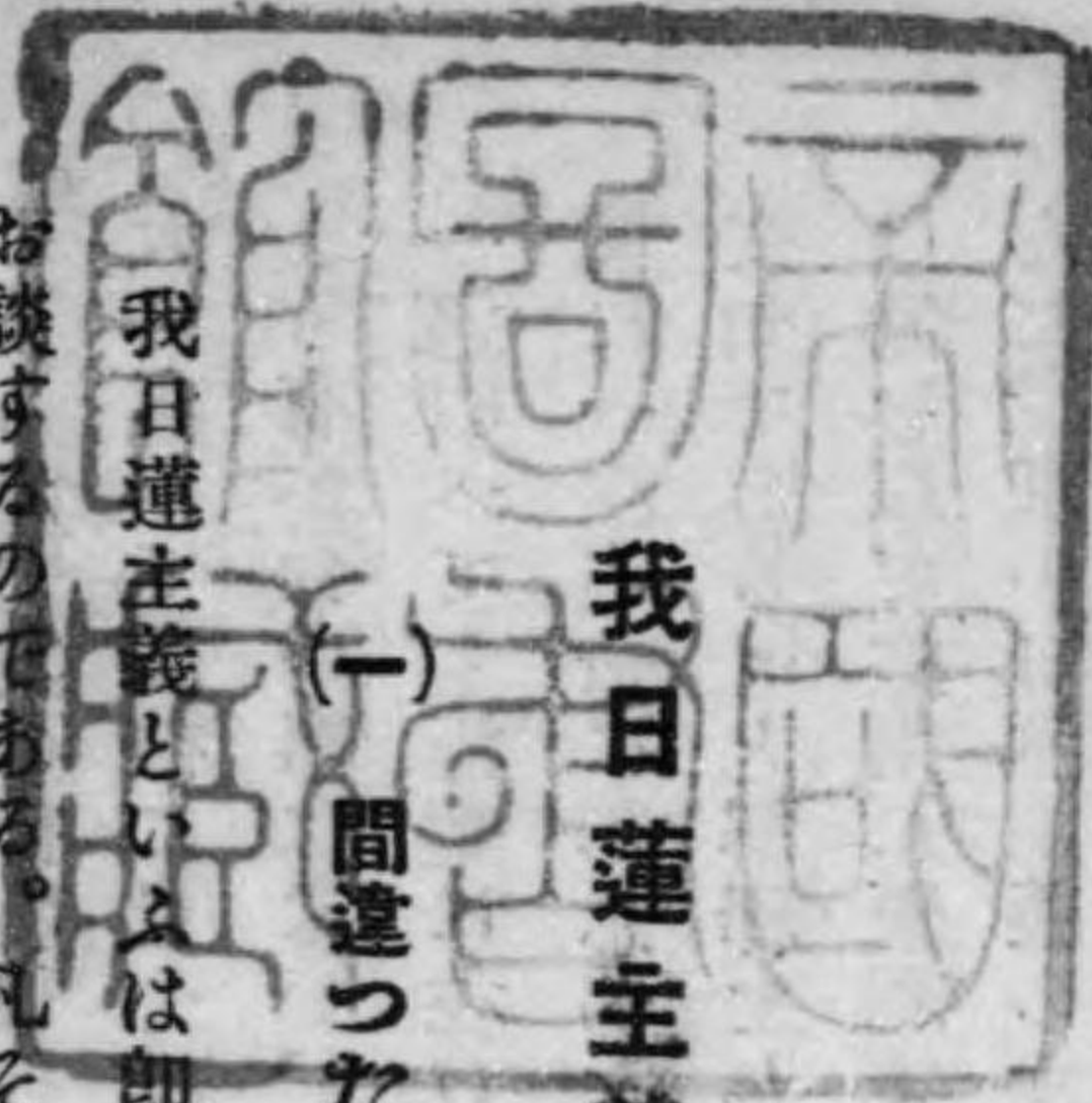
- 一七 海外發展に付二點の注意…………… 四一三
- 一八 自尊心と同化問題…………… 四一六
- 一九 海外の土に汗して天幸を念うせよ…………… 四一八

目次

目次終

日本國體と日蓮主義

海軍中將 佐藤鐵太郎



我日蓮主義

(一) 間違つた解釋

我日蓮主義といふは即ち「我が」日蓮主義で、私が感じ得て居る日蓮主義に就て
お談するのである。凡そ物は觀察に依つて感じ方が違ふ。此間或人格ある人の
求に依り下手な書をかいて需に應じた、其文句は日蓮上人の「極樂百年の修業
は穢土一日の功に及ばず」の聖語であつた。これは此の世の中に於て至難の中に

間違つた解釋

善業を営み又妙法修行の功德を積んでおかねば極樂に往つても何の功もない、人は此世に於て人としての盡すべきに盡さなければならぬといふ上人の御精神であるが、其の書物は仲介者の手から熱心な念佛婆様の手に渡つた、此の婆様大に喜んで誰彼に見せる、中にも或和尚に見せたところが、「此世では信心するより有がたい事はない、世の中で仁儀禮智信は小善である、阿彌陀佛の名號は一遍唱へても極樂に往ける、これが第一の修行である、あなた方も此世に居る間に一生懸命に御念佛を申さなければ極樂に往た後では何んにもならぬといふ文句である」と解釋をした。同じ教でも説明式で大きく違つて来る。昔し盜跖は飴を以て盜用に便利であると思ひ、聖人は老人を養ふに宜ろしいと云つて欣んだ、私の日蓮主義の文句も念佛の事だと解されたのである。頃日の新聞には日蓮主義の書物が澤山廣告される、しかし今の如く見方に依つては大きに相違がある、故に日蓮主義と云へば同じ事でも氣を附けねば間違つた方に落込むか

も知れぬと思ふ。

(二) 釋迦に對する觀念

釋迦如來は大へん緣起の善いお方である、釋尊は家を逃げ出したのではない、世を救ふ爲に種々難行苦行もなされたのである、世を救ふには自ら先づ覺らねばならぬ、此故に道を悟るべく勇氣を持して奮勵修行せられたので、釋尊が世をはかなんで山に逃げ込んだなど考へるのは大へんな違ひである。釋尊一代の事蹟は私の見ましたところでは頓て日蓮主義である、又日蓮上人の事蹟は釋尊の事蹟である。世に釋尊の出家御修行に對して間違つた見方をして居るから佛敎が厭世敎となつたりするのである。

(三) 暑の感じと宗敎

夏は暑い、この暑いといふに就ても考へやうで大へんの違ひがある。幾ら暑くとも行儀はく禮儀も正すと云ふものもある。又幾ら暑くとも涼しいと感ずる、さうすると自然と涼しくなると云ふものもある。又我法力を以て九十度の暑さを六十度に引下げて見せるといふものもあるだらう。又日中は暑いが夕方になれば涼しいから早く日暮になるようにと念ずるものもある。又夏は暑い、暑いけれどこれは仕方がない働くべき時には働いて、夕方になれば晩酌でも夕食でも愉快に採るといふ。同じ暑さに對しても種々に考へが違ふ。此暑さに對する思想を宗教に比較してみると、暑くても只辛抱するといふ之を律宗の坊さんと見る、酒なども飲まずに戒律を保つ(事實は如何か)と云ふ。又暑いのも心頭滅却すれば火も亦涼しなど、意氣する之は禪宗であらう、だが悟りながら汗だくくも如何なものであらうか。又九十度を六十度に引き下げる杯といふは悪くいつて眞言秘密の法であらう。まさかさうでもなからうが、先さう言つた風な

意味もあるであらう、此の眞言秘密の類似は日蓮宗にも無いでもない、善い祈はせずに質の悪い祈で世を迷はすのもあるといふことである。念佛宗は暑い日中はいやだく早く涼しくなるのを待たうといふにあるので。最後の、暑いのは仕方がない暑くても氣を張り職業に出精して大に働き、晩が来れば晩酌でもやるといふのが日蓮主義の思想である。

(四) 現實的活動と日蓮主義

日蓮主義は瘦我慢をするのではない、常に活々とした心が充實して活動をする自分の爲すべき事は如何にしても仕遂げる、現實に此の世の中で善良な事に向つて成し遂げる之れが日蓮主義の活きた事實である。あの婆さんのやうに此の世の念佛は未來の爲だから、未來の百年よりも今日一遍の念佛を唱ふる方がよいと只未來ばかりに執着して此の世を見ては此の世は活きて來ないと思ふ。

(五) 釋迦の蛇の譚と露西亞の現状

只今露西亞は實に面白くない状態である。所が釋迦如來はチャンと之れを教えてをらるゝ、釋迦佛は蛇の談をしておいでになる、之が露西亞の現状をビシヤツと物語つて居る。一疋の蛇があつた、首と尾とが争を始めた、尾の曰く、貴様はいつも先に立つて我を引つ張り廻す、旨いものは貴様が食ふ、怪しからぬ奴ちや實力のあるものが主人とならなければならぬ。首の曰く、我輩は昔から偉いのちや何も争ふ事はないといふて争つた結果、然らば何ちが上か實驗しやうと云つて、尾は木に巻き附く、是に於て首は前に進むことも出来ず、腹がへつても食ふことも出来ず、其處で頭が閉口して、どうも御前の方がエライ様だ御前を主人としよう先きに立て貰ひ度いといふことになり、尻尾の奴は大威張で先に立て進んだ處が、遂には火の燃へて居る穴の中に墜つちて死んで了う

たといふのである。これは釋尊の蛇の譚であるが、人間も亦自分の分限を守ることを忘れるとかういふことになる、如何なる事があつても大義名分を紊してはならぬ。今の露西亞の現状は實に此の蛇のやうではあるまいか、兵隊は曰く我我がなくては戦も出来ず國も守れまい、勞働者は曰く我々が働いて我々が食ふのだ、上の人は曰く己がえらいのだ、何とか彼とか争つて居る結果ヒツクリ反つて、今は逆に歩いて居るのである、日蓮主義は自分の分に應じて努力し勉勵して行くのである、首は首の役に力める、尾は尾の役目につとめる、其へんが日蓮主義であることを知らねばならぬ。

(六) 大義名分を明に

日薄上人は大義名分の衰へた時に成長された。武士が上下の理に迷つて居るときに立つて其迷ひを叱咤されたのである、宗教でも道理を誤つて本佛を忘れ

る、恰ど我家の父を忘れて隣の父を尊んで居るやうなものである。這う云うやうなときに大義名分を明にすべく立つたのである。只今の世界も亦其時に似て居る、露西亞のやうなのは其れではあるまいか。

(七) 我が日蓮主義

今の戦争が終つたならば我邦は種々の上から壓迫を感じるであらう。今は成金などがあつて浮れて居るやうだが、此の反動はあるものと思はねばならぬ。今から後の人々は確と心を定めて、何一つでも國の爲になるやうに心がけて如何なる事があつても腰のくだけるやうの事があつてはならぬ。殊に宗教信仰は精神の基礎を成すものであるから迷信にかゝつて己を誤り國を誤つてはならぬ。二十五億圓の金が地下に埋めてあると騒いだり、又多くの人の迷惑をかまはず米相場が上るやうに下るやうにと勝手な願を神佛に掛る、これ等は皆迷信

であつて併せて國家を毒するようになる。美しい娘を生んで左團扇で生活するやうにと祈るのは不可ないが、立派な子供を生んで國家の爲に又は我家を立派に立るやうにと望むのは條理がある。醫師を無視して病氣の平癒を祈るのは迷信である、慈愛又は孝養心の上から其平癒を祈るのは正しい心の基礎となつて居る。總て物は考へ方次第に依つて大へん違ふ、心の据方一つで東西に分れる、私の書いたものでも、解釋によつては雪と墨に考へ違ふ。要するに、我日蓮主義者は各其の分を守り、極力自分の盡すべきを盡し、如何なる苦しみにも失望せず、如何なる逆境にも落膽せず、毎に出精努力し、他人の難義を見ては同情し、親は親、子は子、君臣は君臣といふ風に大義名分に從つて進退せねばならぬ。我國のやうな美しい大切な御國に生れて來ては寸刻も我國體を忘れず、常に正信に安住して爲法爲國に身を捧げ、一朝事あるときには身を殺して國に殉せねばならぬと思ふのである。

思想の選擇と日蓮上人の教訓

(一) 紅梅より受けたる教訓

我々軍人共に 天皇陛下より下し置かせられたる御勅語の中に「思索ノ選ヲ慎ミ」と云ふ仰せがある、これは獨り我々軍人のみでない、總ての人が服膺すべきいと有り難き御言葉であると云ふ感じが致すので、この意味合の事を述べてみたい。曾て我が或るやんごとなきお方の御殿に伺ひたる時に感じた事があつた。それは我が拜謁を願ひたる御部屋に這入りたるに、非常に良い匂ひが致すので、何の匂ひであるかと思ひつゝ、あたりを見ると、そこに結構なる紅梅の鉢が置いてあるのである。さてはこの梅の匂ひでありしかと氣付きて、その側に寄つて嗅いで見た所が毒々しい程の良い匂ひであつた、そこで成る程この

匂ひが御部屋の一面に満ちて居るのであるな、どうも良い匂ひであると思つて居つたが、その後段々時が経つてから氣を付けて見ると、前の匂ひが少しも分らない、注意して鼻を動かして見たが少しも鼻に感じて來ない、そこで妙に思つて御許しを受けて梅の鉢の側に再び寄つて嗅いで見たら、依然として匂ふて居る、併しながら前の感じとは違ひ、前には毒々しい程の匂ひを感じたけれども、今度は非常に良い匂ひを感じたのであつた。こゝに於て私は洵に好い教を受け、身に泌むやうの訓戒を受けた如くに感じたのであつた。我々は矢張りこの通りで、悪い思想の中に一遍入つて終うと、幾ら注意をしても、自分の考が悪いと云ふことが分らない、再び立ち還つて本元に接すれば分るけれども、その儘では幾ら鼻を動かして見ても匂ひが分らぬのと同じく、間違つた思想の中に這入ると、自分の思想が間違つて居つても、その間違を感じる事が出來なくなつてしまふのである。又これと同じ具合に善い思想の中に這入れば、初め

は善い事をした、今日は善根を積んだと云ふやうな心持がして喜ばしく感ずるであらうが、それより後は自分には心付かずに自ら善い事を致し、自分で善い事をすると思はずに知らず善根を積むやうになるであらう。これは餘程考へなければならぬ事である、嘗に梅花の香りの一事ではないと考へ、洵に好い訓戒を受けたやうに感じて御殿を下つたことがあつた。

(二) ドラゴミロフ將軍の訓誡と日蓮上人の教訓

さて思想と云ふものは自分一人では濟まぬのである、悪疫にあらざる限り身の病は一人で濟むが、思想に一の病氣が起ると恐しく傳染するものである、殊に悪い思想は傳染し易く、自分一個と思つても一個では濟まずどん／＼蔓延する。我々軍人に 陛下より下し賜はり給ふた勅語の中に「質素ヲ旨トスベシ」とある如く、「奢りの風」と云ふやうなものは、傳染病の如く蔓延し易いから慎ま

ねばならぬと云ふ意味のことを仰せられてあるが、悪い思想と云ふものは傳染病の如くにどん／＼ひろがるものであるから、餘程慎まぬと云ふと自分一人では濟まぬ。殊に我々が感ずるのは、(私は軍人であるから、戦争の事について感ずる事が多いのである)、昔からの戦争の勝敗を見ると、無論兵力の多少にも因るが、それよりも尙大なる關係を有つべきものは、その軍隊の間に存在して居る所の思想である、歴史を一覽されたるお方はよく御存知の事である。私は海軍であるから海軍の事を以て例を取つて見ると、英吉利の海軍は歴史の上から見て常に勝つて居る、殆ど敗れたことがない、然るに佛蘭西と西班牙の艦隊は、今は果して如何であるかは存せぬが、歴史の上に遺つて居る所では常に敗けて居るのであつて殆ど相撲にならない、いつでも英吉利の艦隊と佛蘭西若くは西班牙の艦隊と戦ふ時には、勝利は英吉利艦隊に歸するのである、これはどう云ふ譯であるか、研究すると興味があらうがその最後の結論を申すれば、英

吉利の海軍の軍人の間に在る思想は「敵を見れば必ず戦ふ」と云ふ主義である、それから佛蘭西の方はどうであるかと云つたならば、「必勝を期せずんば戦はず」と云ふ主義で勝つと云ふ見込が立たなければ戦はない方針を取つて居る、又西班牙はどうであるかと云へば「已むを得ざるにあらざれば戦はず」で、成るべく戦ひを避けて目的を達しようとする云ふ主義で各その思想を異にして居る。この思想は皆いづれも詮じ詰むれば悪くないので、どれも理屈は立つのである、けれどもその結果として顯はれることは、皆いつでもハッキリとした結果となつて顯はれるのである。更に少しく他の例に轉じて云ふならば、それは露西亞にドラゴミロフといふ將軍があつて、この將軍が常に自分の部下を教へて居つた面白い言葉がある、「敵に對して先づ「ウラー」と叫ぶ者は勇者である、（之を日本で云へば敵を見て先づ萬歳を叫んで突撃する者は勇者であると云ふ意味である）、若し敵に遇つたならば先づ銃を以て射よ、銃を以て射て尙敵を斃すこと能

はずんば銃劔を以て突撃せよ、それでもいけなかつたならば銃床尾を以て打て、小銃が折れたならば敵に喰らひ付け」と云ふ教である、これは何でもない事のやうであるが、ドラゴミロフ將軍のこの訓戒は、將軍麾下の兵をして嚮ふ處敵無く常に人をして心膽を寒からしめ、如何なる戦ひでも大成功を以て終つたのである。このドラゴミロフ將軍の訓戒は僅かの言葉でちよつとした事のやうではあるが、この意氣込、この思想は、之を以て敵に對するときは如何なる敵をも打碎くべき立派な武器である。斯う云ふ意味合からして考へて見ると、日蓮上人が仰せられたことにはドラゴミロフ將軍以上の言葉が澤山ある。私は軍人として日蓮上人の御遺文を拜見する毎に血が沸き肉が動くやうに感ずるのである。私は無學であつて多くの書物を読んで居らぬが、今迄いろ／＼の本を見た中で、又いろ／＼の人から聞いた言葉の中で、日蓮上人の御遺文を拜見する如く血沸くとか肉が顫ふと云ふやうな感じを以て讀むものは決してないのであ

る。多く記憶は致して居らぬが、少しくそれを擧げて自分の感じを述べてみやう、いづれも皆私の非常に好きな文章である。

『縦令頸をば鋸にてひき切り胴をば稜鋒を以て突き足にはほだしを打ち錐を以てもむとも命のかよはん程は南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死するならば……』

と斯う申されて、尙かやうにして死んだならば、豫ての約束であるから諸天善神は必ず靈山に出迎ひ下されて我等を守護し給ひ、慥かに寂光の寶刹へ參ることが出来るのは疑ひも無いと云ふ意味のことを申されて居るのである、實に壯快な文章である。或は

『總じて日蓮が弟子と云つて法華經を修行せむ人々は日蓮が如くにして候へ』と申されて、御自分に倣へ、何もやかましいことを云ふに及ばぬから我の通りに倣へと云ふ權威あることを申されて居る。又

『不覺の殿原かなこれ程の悦びをば笑へかし』

いろ／＼の迫害に對しては皆悦びを以て迎へられると云ふ考を文章の中に顯はして居られるが、我々も斯う云ふ心を以て事に當つたならば非常に愉快なことであらうと思ふ、我大日本國の人々は是より萬事益々向上して進んで行かなければならぬのであつて、決して逡巡したりなんかして居る時ではないのであるから、上人のお覺期の如く『これ程の悦びをば笑へかし』と云ふ心構へにして、設ひ如何なる大難が來るともそれに恐れず反て悦びを以て迎へると云ふ勢を以て進んだならば、事を成すことは何でもあるまいと私は思ふのである。

『……日蓮さきがけしたり和黨共二陣三陣つゝきて迦葉阿難にも勝れ天台傳敎にも越へよかし』

これは自分が先陣を承つて魁けたからお前等は二陣三陣として來い、我等は日本第一の法華經の行者であるから迦葉にも阿難にも天台にも傳敎にも劣りは

せじと云ふことを申された非常に立派なお言葉である。

(三) 日蓮聖人の教訓の二

殊に我々をして思はずぶるゝと顛へさせられるやうな立派な文章は、開目鈔中に斯う云ふことがある。

『大願を立ん、日本國の位をゆすらむ法華經をすて、觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用ひじとなり、其外の大難風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちかひし願やぶるべからず』

自分は大願を立てよう、たとへお前に日本國の位を譲るから阿彌陀の三部經を信じて後生を願へと勸むるとも、又自分のみならず、自分の父母の頸を刎ねる

がそれでも念佛を唱へ阿彌陀佛に歸依せぬかと脅かすとも、そんなことで自分の志は決して替へぬ、かゝる此上も無い大難が出來するとも、何とも思はぬ位であるから、勿論自分の身を斬りさいなまるゝ位のことは何でもない、此外の大難は風の前の塵で少しも恐るゝに足らぬと申されて居る。殊にえらいと思はれるのは、若し智者が居つて、自分が信じて居る事が謬つて居ると云ふことを曉して呉れたならば、それに従ふと云ふことで、さもなければ、如何なる事があつても間違つたお經などに歸依することはせぬ、間違つた思想には囚はれはせぬ、しかし縱令日本國の位を譲らるゝとも、父母の頸を斬らるゝとも動かさない大願なり決心があつても、若し自分より勝れた智者があつて謬りを教へて呉れて、自分が謬つて居つたことを覺れば、いつでもそれを従ふと云ふことである。さう云ふ風に何でも正しき道であれば歸依し包容すると云ふ公明正大の覺期を以て大決心をなされたと云ふことは實に驚くべきことである、又『我日

本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちかひし願やぶるべからず』と云ふに至つては、實に壯烈無比で何とも譬へやうがないのである。我々は毎日々々大上人の御遺文を拜見するたびに、斯の如き言葉を以て教へ導いて下さるのであつて、かやうの意氣込を以て世の中に立つたならば、どうであらうか、私はたゞ感嘆に堪へぬのである。もう一つ私が深く感じて居ることは、我々は今まで犯した罪障があり、この穢れたる身で果して悟り得らるゝかどうか、日蓮上人の云はれるやうな立派な事が出来るであらうか、威奮せしむるやうの言葉がある。

『不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲せられしも先業の所感なるべし、何かに況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出でたり、心こそすこし法華經を信じたる様なれども、身は人身に似て畜身なり、魚鳥を混丸して赤白二諦とせり、其中に識神をやどす、濁水に月のうつれるが如し、糞

囊に黄金を包めるなるべし、心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶恐ろしと思はず……』

自分の身は魚や鳥を混ぜくつて血や肉が出来て居る穢れた身であるが、併し心に法華經を信じて居れば立派なものである、恰も濁つた水に月の宿つたやうなものである、この身は人身の如くにして實に畜生と違つて居らぬけれども心の中に眞理を信じて居る以上は梵天帝釋も恐るゝに足らぬと云ふことを申されて居るのであつて、さう云ふ立派なお覺期がある。亦

『日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども、佛法を以て論ずれば一閻浮提第一の富める者なり』

と申されて居る。是に由て考ふれば、我々の身は穢れたる小さい身であるが、其心の中に一の赤誠があつて、眞理を奉じて躍進したならば、梵天帝釋何を恐るゝに足らんやと云ふ、非常なる勢力を付けて下される教が日蓮上人に依つて

與へられて居るのである。

(四) 日本には禁すべき思想

我々が斯様な意味合のお言葉を常に拜讀して居つて大上人の有つて居られた思想の中に入つて行つたならばどうであらうか、ドラゴミロフ將軍の云はれたやうの言葉とは違ひ、意味深長にして何とも云へぬ言葉が澤山ある。その顯はれた根源の思想に這入つて、それを奉體致したならばどんな心持になるであらうか。又この心持を反對に考へて見たならどんなものであらうか、或者は自分の身をたい畜身その儘に見て我々はどうせ地獄の者である、この穢れた世の中の有様を見てはどうしても穢れた事の外は出来ぬ者である、此世の中では逆も立派に悟ることは出来ないから、あの世に行つて佛に助けて貰はう助けて下さるに相違ないのであるからと云ふ心持になつたならば、その思想の根本の違ひ

はちよつとした違ひでも、その結果は非常に大いなる懸隔を生ずることになるのである。同じ奮勵であつても日蓮主義で奮勵するのと、厭世主義で奮勵するのとは較べものにはならぬ。大聖人の教を受けて俱に進む所の奮勵努力は非常なる力がある、けれども思想が若し謬るととんでもない事になつてしまひはせぬか。又同じ未來主義の教でもちよつとした事から大變の違ひが起るのであつて、私は常に感じて居る事がある、こゝで他の宗旨の悪口は餘り申さぬが、同じく他力の觀念を有つ阿彌陀の三部經を信ずる意味合でも、法然上人の申されたことゝ、親鸞上人の申されたことゝは、同じ根本でありながら見方に依て非常に違つた所が出来て来る、こゝが所謂思索の選の必要な所であらうと思ふ、私ほどつちがよいとも申さない、總て同じお釋迦様の教であるけれども、その見方に依て大變に違つて来るのである。殊に不思議に思ふのは善人と悪人との關係である、法然上人は『惡人尙は生る況や善人をや』と云はれて居る、惡人すら

淨土に生れるのであるから況して善人の生れるのは申すまでもないと云ふことである、併しこれでは他力がハッキリ顯はれない、然るに親鸞上人の申された所を見ると『善人尙往生す而かも況や惡人をや』と云はれて居るのであつて、善人ですら往生するから況して惡人は云ふまでもないと云ふことで丁度前のは反對になつて居る、斯の如く同じ阿彌陀の三部經でも見方に依ては其の思想に大きな相違を生じて來るのであるから、餘程思索の選を慎しまぬと云ふと、とんだことになることは、是に由てもよく分るやうに思ふ。どうしてもいろ／＼の思想の選擇が必要である、そこで日本に在る所の思想はどうかと申すと、これはどうしても日本に適當のものでなければならぬ、日本に適當しない所の思想は日本に存在して居つて貰つて困る、この存在を許して居ると云ふと、今申上げたやうのことで、毫釐が千里とんでもない間違ひが生じて來る、故にこゝは餘程注意して選ばなければならぬのである、日本に適せざる思想は日本に大禁

物であつて、早々立退を命じなければならぬ。それは自分を以て卑しいものとする考が最も宜しくない、日蓮上人の云はれた如く身こそ畜身であれ精神は梵天帝釋をも恐れぬと云ふ氣高き勢ひがなければならぬ、又此日本をきたないと思つてはならぬ、日本の國を穢土と思ふやうの考へでは日本が無下に卑しくなり、随つて日本を尊敬する考が無くなつて來て、終に日本の衰滅と云ふことが起つて來るから思想の選擇は之を雄大なる日蓮主義に探らねばならぬと思ふ。

國家と軍人と日蓮上人

(一) 予が國家觀念と法華經

私は皆様御承知の如く元來軍人であるので、國家と云ふ問題を學問的に研究致した事はないが、職務が職務であるから、曲りなりにも國家といふものは全體何う云ふ者であるかと云ふ事は常々考て居るのであるが、如何せん西洋の學者でも支那の先生達でも、自分の考に適合する如き解釋を與へて呉れない。學者の研究としては研究の方面は幾らもあらうけれど、軍人の國家觀は命懸けである、自分の生命を投げ出して守るべき國家の事であるから何處迄も眞率でなければならぬ、思想がふやく／＼では到底立派なる決定を得ることが出来ぬ、一個の學説を發見した位では固より満足が出来ぬ、其處で私は別に此問題の研究に

ついて煩悶は致さぬのであるが、常に氣を附けて國家觀の養成を心懸けて居たので、一度法華經を讀むに及び臆氣ながら考て居た思想に決定を與ふる事が出来たのである。要するに法華經の拜讀は私の爲には非常なる樂となつたので、諸方面の疑團に解釋を與へて分明ならしめたる大光明であつたのである、

(二) 國家成立の性質と其の選擇

『彼の國に好かりし法なれば此國にも好かるべしとは思ふべからず』と、日蓮上人も仰せられたる如く、國家の成立が違へば國民の觀念も異なり、軍人の國家觀も亦從て同一と云ふ譯には參らぬ。宗旨を根柢に置きたる國家には護法の爲に死ぬのが幸福である。また個人の利益を保護する爲に成立したる國家の軍人は、各自の利益幸福の爲に戦ふのである。帝徳の盛なりし時代は露西亞の軍隊の先頭には、多く十字架を捧げた僧侶が突進して居たのであるが之は護法の

觀念を表するので、天子は護法者なりとの意義より出たのであらう。共和政治國の軍隊は、個人の利益を保護せんとする主義の轉化であつて此主義を守り亦此主義の發展を天職と心得て戦ふので、其結果は他民族の殲滅を意味せざれば已まぬ、從て又同民族の絶滅を意義するのである。是等の關係をヨウク考へて見ると、皆悉く割據的思想の發顯であつた決して至正至公と云ふ譯には參らぬ、何うしても至純至精なる人道より見たる正道を進むものと謂ふ事が出来ぬ。是等は皆國家其もの、成立が正くないので、形正からざれば影斜なりの道理である、尊氏の家來は如何に忠義を盡しても、誠の忠義と云ふことが出来ぬと云ふ様に、國家が正からざれば國家の爲に如何に忠節を盡しても、本統の道に協ふとは申されぬ。この道理を考へて見ると、云ふに謂はれぬ味が出て參るが、果して如何なる國家が眞の國家かと云ふ判斷が、先づ第一に必要なこととなるのである。

(三) 我帝國と法華經

此點に就ては、我は我帝國を以て此上もなき立派なる國體を有する國である
と考ふるのである。其理由は開闢以來君臣の分定まり、萬世一系の皇統を戴く
と云ふ點にあると考ふるのであるが、其れが何故に眞の國家かと云ふ點に至つ
てはまだ、何となく物足りないやうにも思ふのであつた。然るに法華經に於
ては「我成佛已來甚大久遠壽命無量阿僧祇劫常住不滅」としてあるので、私も
壽命品を拜讀致しまして無限の感に打たれたのである。過去にも生ぜざればこ
そ未來に滅せず、過去にも滅せざればこそ未來にも生ぜぬのである。本來より
現在し賜へる如來に未來永劫生死あるべき理由がない、其間に生じたまへる諸
尊は、衆生を化度せんが爲に此世に出現せられ、假りに滅度を示して衆生の心
に厭念の念なからしめ、常に戀慕の心を起して渴仰恭敬せしめらるゝのである。

此の如く玄妙不可思議なる大作用は、實際上我帝國に實現せられつゝあるもので、この一事より見れば、法華經は實に我御國體の解釋である、『今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護』と云ふに至つては、我國の如き御國體でなければ此の經文の解釋の出來ぬのみか、到底衆生の安穩幸福を期し難きの意味合がハッキリと解る。其の普遍的にして局限的の性質を有して居らぬ一事に至つては、佛敵の首領たる提婆が成佛するので、聲聞緣覺悉く皆成佛する、八歳の龍女も成佛する、山川草木有情非情皆悉く成佛する底の大作用を有せらるゝので、此意義に於て我御國體と融合するのは實に奇異の感に打たるゝ位である。

(四) 統一能化の天職を全くする國家

斯の如き大意義は革命の意味ある國家にては到底思もよらぬ事であるので、

千年萬年の後、此の世界が渾然融和して一國となる事がある以上は、無始無終常住不滅の如來が、此三界は皆是我有なりと仰せられた如く、無始無終常住不滅の意義を有する國家が、世界の融合に關し能化の天職を全うせなければならぬので、他の國家は、如何にするも、所化の立場にあらざるを得ざるは明かなることゝなるのである。

(五) 統一的國家と法華經の流通

人に依りては、國家は一も二もなく分立を意味するので、この分立したる國家は其存在の意義の如何に關せず、悉く皆平等なりと信するものが多いので、我帝國も他の諸國と同様分立以上の意味を含まぬものと考ふる人が多いのである。さればこそ世界的教義寧ろ人類的教義を有する宗教は、國家の存在と相容れぬ、従て國家的宗教なるものは決してないと論ずるものもあり。國家の分立

は宗教の統一と没交渉なることは、假令ば甲乙兩者は全然分立したる箇體なるも、共に同一の意義を有するが如しと云ふものもあるのである。従て宗教を以て超國家の意義ありとし、教界の偉人を以て超國家の思想を有するもの、如く考ふる人もあるのであるが、是等の説は必竟法華經は我國體の解釋である、我國家は其存在の大意義に於て法華經を色讀しつゝありとのことを考へぬからであるので、此意義は日蓮大上人が既に業に充分に説き置かれてあると私は考るのである、『日本一州は印度震旦にも似ず一向純圓の機なり』『日本國は一向に法華經の國也』は則ち之れである、『一閑淨提第一の本尊此國に建つべし』なども、この點に存する主張の發露である、則ち我國の御國體は法華經に依りて彌々明白に説明せられ、我國の如き法國冥合の關係意義ありて始めて法華經と融合すべく、我日本は即ち是れ世界である、固より餘所八萬の國々の如き分際ではないと云ふとを説明せられてあるのである。何に致せ革命の事實若くは意義ある

國家は、眞の國家ではないのである、反亂も篡逆も公に行はるゝ國家は法華經の意義には協はぬ國家である、従つて革命の意義ある國家に法華經の流通せぬのは無論の次第で、世界統一の意義を有する宗義が分立の意義ある國々の間に行はれ得ざるは勿論である、従て我國の如き國體を有するに於て初めて行はるべきであつて、法華經は我國を以て發展の基地として世界に擴布せらるべき運命を有するのである『佛法は東土日本より出べきなり』との觀念は、則ち日蓮上人の深く信じて疑はざりし所である。

(六) 日蓮上人は國體觀念の中興論者なり

我が先年國體に關する信條を發表したる際には、先輩の方々は存せぬが、同僚のものなどは一篇の好辭令位に考へ、一向振り向きも致さぬのであつたが、此頃は先輩の方々の指導に依り種々の事も明白になり、同僚間の思想も大に進

歩致して我國體の崇高無上なる意義も段々と明瞭になり、自然々々に我國の天職を感得する事になつたのは、誠に以て芽出度次第で、之れ偏に法華經の力、日蓮上人が栽培し置かれた種子が、段々と花を開き實を結ぶ事になるべき様子であらうと考へると、云ふに謂はれぬ快感を催はすのである。て今日に於いて云ふのは無益の如くではあるが、我國の歴史を見ると、法華經の流通が全國に遍し、我等同胞の祖先は靡然として皆法華經の人となつたのであつたが、天に二日なく國に二王なしとの意義か、何となく不明瞭となるに及び他の雜然たる宗義が起つて、御國體の光輝は「スリガラス」を通して眺むる如き有様となつたので、魍魎魍魎の如き惡思想が、彌々益々發達するに至つたのである。そこで我日本は一時的時代思想のみならず國民的思想にすら大變化を起し、一時は其危害誠に測るべからざる有様となり、國體に對する信條も觀念も殆んど盡きはてんとするに至つたので、其極端とも稱すべき場合に、日蓮上人の立正安國主義

が發揮されたのである、是は如何にも痛快な次第であるが、如何せん妙法の弘通は他の宗派の廢絶を意味するのみならず、鎌倉幕府其れ自身の存在を許さぬので、言ひ換ゆれば、常住不滅を意味する唯一の轉輪聖王を認めて其他を認めぬので、法華經の弘通は潜越を極むる北條氏の存在を許さぬのである。多くの人は良觀等の俗僧のみに惡名を附するのであるが、畢竟臭き者同志が攻守同盟を結で日蓮上人に抵抗したと云ふ次第で、北條の役人は如何に日蓮主義に屈服しても幕府の滅亡には易られぬので、ア云ふ事になつたのであると私は信ずるのである。此處の道理を考へて見れば、日蓮宗が征夷大將軍を理想とする足利氏にも織田氏にも、又徳川氏にも容れられぬは自然の結果であらうと思はれるので、法華經の主義は如何にするも、明治大正に昭代の如く民に二主なく國に二王なく、諸の小王を廢して唯一主を立つ、王は本より一統なりとの日蓮上人の御主張の如きに於てこそ始めて發展すべきものである。此の如く難有今日の御

代に於て幾十年も碌々として發展せざるが如きは、如何に他の酌量すべき事情なきにあらずとは謂へ、必竟日蓮宗各派の方々の精神が充分でなかつたのではあるまいか、此言葉は如何にも僭越ではあるが、腹藏なく所感を述べれば實に右の通りである。

(七) 國家的日蓮主義

元來日蓮主義は、宗教と道徳とを克く融合せしめたもので、一面に於て國家主義であり、真正なる國家を得て之と融合し未來の大發展を豫望しつゝ起つたのである。日蓮上人の言に『國は法に依て昌へ法は人に因て貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべき哉、先國家を祈りて須らく佛法を立つべし』とあるなどは良き證據である、『御宮仕を法華經と思召せ一切世間の治生産業者皆實相と相違背せず』と言はれたるが如きも同じ思想であるかと考

へられる、『法は必ず國を鑒みて弘むべし、彼國に好かりし法なれば此國にも好かるべしと思ふべからず』、又『日本一洲は印度震旦にも似す一向純圓の機なり』との如き、種々の御妙判を拜すれば、日蓮主義—國家主義—眞國家—日本と云へる脈絡が明瞭に解釋し得らるゝのである。他の宗義の批判を致す譯ではないが、假令日蓮主義の一部が他の宗義に合するものありと假定しても、此意義に於ては日蓮主義特得の者なりと私は信するのである。他の宗でも『聖壽の無疆』と『國運の隆盛』とを禱るのではあるが、其根本義に於ては果して如何なる者であらうか、是等の事から考へて見れば、根本的に我帝國の國體と相冥合し、王法佛法に冥し佛法王法に合すと申すべきは、獨り法華主義則ち日蓮主義のみであるかと考へるので、此意義に於て日蓮上人は釋迦如來の教職を更に向上せしめ、一向純圓の意義を十分に發揮せられたのであるが、若し萬一我國の如き國體の御國にお生れにならなかつたならば、上人と雖も恐らくは此の如く明瞭に王佛

冥合の妙趣を發揮するゝことは出來ずに終つたかも知れぬのである。此點こそは實に只上人が此日本國にお生れに成つたを非常に嬉しく思はれた譯であらうと思はれる。

(八) 日蓮主義を誤れる論者

然るに世間には動もすれば、日蓮上人の人格を崇拜するの餘り超國家なりとか、或は小日本の如きは日蓮上人の眼中には無かつたのであるもしも妙法を充分に弘通すること能はずば寧ろ亡國を望まれたのであると云ふ如き、不謹慎なる言葉を以て上人を偉大ならしめんとするが如きは、一には上人を小さくし、二には我國體を小さくし、法華經自身の意義をも小さくするので、人類の爲めとさへ云へば何となく日本の爲と云ふよりも偉大なるが如く考ふる迷想が不知不識此の如き大なる誤をなすに至つたので、必竟國體を知らざるの致す所である

と申さなければならぬ。閻浮提第一の戒壇として我日本國を看、一向純圓の機なりとまで云はれたる同一の思想より日本の滅亡を一笑に附せられつゝ、他の一方には日本の亡滅を豫言せられ、寧ろ謗法の國たる日本の滅亡は一時の悲嘆にして永遠の歡喜を意味すと云ふが如き思想を起さるべき理由はないので、小蒙古御書に於ても其邊の御考が明瞭に分るのである、國家の大事を餘所事にして豫言の適中を誇るが如きは斷然破門すると迄仰せられたのである。

(九) 斯の主義と斯の帝國との相助

是等の關係を考て見れば、日蓮主義は他の革命の意義ある國家とは融合し難き意味合がある、寧ろ其等の劣等なる國體の爲には仇敵とも云ふべきであるが、我日本帝國の如き崇高なる國體に於ては日蓮主義の如き思想にあらざれば、到底渾然融合する譯には參らんのも亦勿論である。則我日蓮主義は我大日本帝國

と共に盛衰すべきもので、大日本帝國はこの主義を以て唱へ、日蓮主義は我帝國を得て始めて榮ゆべきものであると云ふことが明瞭に相解ることゝ信じる。我等軍人が日蓮主義を崇拜すると同時に日蓮上人を鑽仰する根本義は、日蓮主義は我帝國の神ナガラの道に合し、此主義にあらざれば我帝國の偉大なるを悟り又之を擁護し奉るべき道なしと信ずるによるのであるが、箇人的軍人として日蓮上人を鑽仰し其徳風を慕ひ、及ばずながら上人の御人格を模範として進むのが何よりも大切であると云ふことを考ふるのである。

(一〇) 上人の大勤王心

我々が日蓮上人の人格に就て、殊更に慕しく感じるのは精忠の二字にあるので、古來忠義の士としては先第一に和氣公を推するのであるが、日蓮上人は決して和氣公に劣らぬ忠義の御方である。北條氏の爲には此上もなく尊敬すべく

其名を聞ては鳴く鳥もひそみかへるべき北條義時に對し、其惡逆を惡むの餘り何の恐るゝ色もなく、『日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人：：第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也』と迄斷言せられたるは皆人の知る通りである、『隱岐の法皇は天子也、權太夫殿は民ぞかし、子の親を怨まんをば天照大神うけ給ひなんや、所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用ひあるべしや』と言はるゝに至ては精忠の餘りとより外云ひやうがない、殊に『民の身として天子の徳を奪ひ取るは下剋上、背上下等之なり、設ひ如何に世間を治めんと思ふ志ありとも國も亂れ人も亡す可し』、と云ふに至ては、更に深刻である、『昔より今に至るまで王法に敵を爲し奉る者何者か安穩なるべきや、狗犬が獅子を吠へて其腹破れざることなし』と罵り、『逆臣が旗をば官兵は指すことなし』と賤め、『御みやづかひを法華經と思召せ』と教へ賜ふに至ては、權威を惧れずして忠節を勧め、己れの身には如何なる災難の來るをも顧みざる底の精忠は、何人も及

ぶべからざる所であらうかと考へる。殊に上人の皇室を尊ばせ賜ふの證據としては、妙法の弘通を初めらるゝに際しては、恭しく之を伊勢の大廟に奉告せられ、孫弟子に當らるゝ日像上人に帝都の弘通を付囑せられたる一事に照しても明瞭である、此の他軍人として日蓮上人を景慕するのは、克剛にして克柔なる點にあるので、凜然たる勇氣と靄々たる和氣とが極端に發揮されて、而かもよく融合するが如きは誠に以て言ふに言はれぬ趣があるのである。古來我國軍人の精神を遺憾なく表はして居るのは石の上の乙磨の歌に『物部の臣の男子は大君のまけのまに／＼きくとうものぞ』と申されてあるのと、稱徳天皇は宇佐八幡の嚴烈なる神勅を被り、痛痕なる大詔を發せられたる際に『是東人は常に云く額に箭は立つとも背に箭は立たじと云て君を一心もて護るものぞ』とあるが之を上人が『如何に強敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なかれ、縦ひ頸をば鋸もて引切りどうをばひしほこを以てつつき足にはほだしを打つてきりを以

つてもむとも、命のかよはんきは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死するならば』と仰せられたるに比すれば何等の異なる處ないのである。

(一) 上人の情愛

此の如く峻烈なる他の一方には、事もなげに『只女房と酒うち飲て南無妙法蓮華經と唱へ給へ、苦をば苦と悟り樂をば樂とひらき、苦樂共に思合せて南無妙法蓮華經とうち唱へさせたまへ』と言はれ、日朗上人の牢居の様子を思ひやられては、『今夜のさむさに付ても、ろうのうちのありさま、思ひやられていたはしくこそ候へあはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば父母六親一切衆生をたすけ給ふべき御身なり、乃至籠をばし出させ給ひ候はゞとく／＼きたり給へ、見たてまつり見えたてまへらん』と結ばれたる情愛の如きは、何と申すべき言葉もないのである。

(一) 上人の正直

元來悟り顔に他の人に對する人々は、如何にも清爽骨に徹する如き事をいふのである、『心頭を滅却すれば火もまた涼し』とか、或はまた敵前にありて心中は顫き畏れながらも、如何にも壯快の様子を見せかけて、而も大切の場合に色を失ふて逃げるなども多いのである。一例と云ふ程の事ではないが、日清戦役の九月十七日の戦、彼の日の戦は丁度一時頃から始まつたので、敵を見ながら晝食に就たのであつたが、如何なる故かどうも食事が安らかに參らないのであつたが、後日になつてから人々の話に、直に戦が始まるので腹が空いては困るからと思ふて、充分にたべたと云ふ人が多かつたので私は自分ながら自分の卑怯を恥入つたのであるが、あの戦には自分も別に人に劣つた働きをした積りではないので、この點から考へるとどうも他の人の云ふ事が受取れぬから、其後

何人が見ても立派な事を致した私の親友に尋ねて見たら、皆私と同様の心持であつたと云ふことを知つたので始めて安心致した事があつたが、生來大勇の人は別として、一般の人はどうも本統の事を云はぬものと見へるが、この點は私が最も日蓮上人を慕はしく考へる點であつて、『苦をば苦と悟り樂を樂と開く』と云ふのは則ち此點に相違ないのである、『身延山は如知食、冬は嵐烈しく、降り積む雪は不消極寒の所にて冬間晝夜の行法も膚薄しては堪へ難く』など申さるる様子は實際そのまゝで、決して南無妙法蓮華經を色讀する身には寒さも寒くは覺えも不申とは云はれてなく、寒さは寒し暑は暑しと云はれながらも、寒さを寒しと悟り暖を暖と開く底の心持で居らるゝので、この邊は誠に慕はしく感じるのである。

(一三) 上人の剛健大義名分孝養

而かも其主張を述らるゝ場合に於ては他の一面に於ては、『日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅ケ家より出たり』と仰せながらも、或は、『日蓮は日本第一の法華經の行者也』と云はれ、或は『我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん』、『日蓮なくば誰か法華經の行者として佛語を助けん』、『日蓮は日本第一の富めるものなり』、『日蓮其身にあひあたりて大兵を起して二十餘年日蓮一度も退く心なし』とまで申されて居らるゝのである、其極度に於ては、日蓮上人は炎をも避けず打たれに打たれて後立派なる劍となるが如き至剛至堅なる勇氣を有しながらも、朝顔の花は日の登ると共に凋み落ると知りながらも、之を摘み去るに忍びざるが如き鹽梅の床しさを備へて居らるゝので、誠に以て慕ふべきの限りである、而かも其大義名分の觀念の高いことは、『孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に參るは孝の至りなり』と云はれたるにても明瞭であるが、願みて其兩親に對せらるゝ孝心の深かつたことは、上人の傳記に明白に傳へられて居るのである。

(一四) 上人の教と軍人

是等の點を考へて見れば、國家に對する觀念と謂ひ、忠君の思想と謂ひ、勇氣と謂ひ、慈悲心と謂ひ、御一生の様子の極めて質素であられた事と謂ひ、禮義正しくあられたる事と謂ひ、其傳記の上にも消息の上にも明瞭であるので、我々軍人の目に映じたる日蓮上人は、實に軍人の典型であるのである。死に臨んで恐れず利の爲に心を動さず、世に先つて憂へ世に後れて樂み、終身安樂を願はずしてたゞ一心に君の爲め國の爲め神佛の爲めに盡さるゝは、實に國士の典型である。

日本の天來的國體と日本民族の天職

(一) 國家の成立と民主的統領

一體國家と云ふものはどう云ふ風に出來たものであらうか、之を學究的に云ふのは他の學者の方に願はなければならぬが、先づ國と云ふものは人の集りである、人が集まらなければ國が出來ぬ、人が集つた以上はそれが段々殖えて國が出來る。さう云ふ譯であるから人が集まれば其處に必ず首長がなければならぬ、國とか何とか云ふことになるそこには必ず統領がなくてはならぬ、政黨などでも總裁とか何とか云ふやうにお頭がなくてはならぬ。其お頭と仰ぐ人と其他の人との關係に於ていろ／＼に分れて來るのであつて、大抵の國では國民全體で自分等の君主を推戴するのである。例へば其處に偉い人があると其偉

い人に治めて貰はぬと治まりがつかぬから、一の賢者を推戴して、さうして其人を君として仰ぐことになつたのであらうと思ふ。支那あたりでは矢張りさうであつて、昔から君となり臣となると云ふことは特に一性に限るのではないと云ふことは支那の古よりの思想である、それであるから聖人と言はれる堯なども「朕才德無くして卿等の冒擧を蒙むる朕敢て天下の民命に負かず亦敢て卿等の推立に負かず」と云ふことを言つて居つて、自分は衆人の爲に推されて立つたのであるから衆人の言ふことには背かない又衆人が私を推立てて呉れたと云ふことに付ては相當の酬をする、決して背くやうな事はしないと云ふ誓を立てた位の有様であるから、是等は疑もなく皆から推戴された所の君である。今の共和政治などと云ふのは皆さうであつて、共和制などと云ふて大變偉いやうであるが、お前方は私を推戴したから私はお前方に従ふと云ふやうな意氣込で、どうも徳川の三代將軍などよりも餘程意氣込が悪い、三代將軍は自分の世にな

つた時に、自分の祖父や父は諸君の御盡力を被つて將軍になつたけれども、自分は生れながらにして將軍となるべき資格を備へて居るのだから、祖父や父と一緒に思つてはいかぬ、若し不平であるならば國へ歸つて兵を集めて來い、立派に相手をしやうと言つたさうであるが、斯して見ると徳川家光の方が堯よりは餘程人物が高いやうに見える。もう一つは澤山人が集まりますと其中に誰か強い者が出て來て、我意に従はぬものを打倒して頭領となる、是は何處でも大低さうであつて、實際其方が多いのであらうけれど、斯う云ふ強い者が王となると云ふ國では、果して其國の平和が能く維持することが出来るかどうかと云ふことになる、どうも是はいけないに相違ないといふことになる、盛徳のある人が頭領となつて居つた時には成程宜いであらうが、さういふ場合に皆が大徳であると云ふことを認めたならば宜いが、たつた一人が偉くて外の者が皆馬鹿であれば宜いが、堯に近い位の人間が外にあるかも知れぬ、又多くの人の中

には堯よりもつと優れた者があるかも知らぬ、さうなると其間に自分の好きな者を擧げると云ふことが起つて來て、始終其の間に争が起る、詰り偉い人を推戴して其人に治めて貰ふと云ふ意味は、大勢の人が勝手なことをして少數の人を無理押付にするのであつて、少ない側の方の人は厭で堪らぬかも知らぬけれども、無理押付にされて已むを得ず黙つて居るのであつて、此間の不平は非常なものである。今の共和國などは現在でもさうではないか、彼の大統領選挙の競争なども何時も激烈なもので、主義の違つた候補者兩方に分れて、片方が大統領となると、どうしても反對主義の人は國外へでも逃げなければ、已むを得ず、小さくなつて壓服されて居らんければならぬと云ふやうな形になる、さう云ふ工合であるから時々刻々頭を擡げやうと考へて居る、さう云ふ有様であるから或意味に於ては争亂が絶えぬのである、徳を以て立つて居る場合には宜いけれども、是が酷くなると買収が行はれる、買収の行はれる位は宜いが、

今度は内亂が起つて來る。論より證據既に南北戦争などもさう云ふことから起つて來たのであつて、佛蘭西の如きも今まで何遍も／＼いろ／＼な事變があつたが、何時でもさう云ふやうな意味からゴタ／＼して居るのである、又強い者が王となつた場合はどうなるかと云ふと、必ず王位を子孫に傳へるといふことになるのであるが、段々徳が衰へて來ると、篡奪弑逆有ゆる事が起つて來る。支那なども初めは推戴主義であつたのが、徳でいかぬから強い者が上に立つやうなことになつて何時でも放伐弑逆篡奪と云ふやうな事が歴史の殆ど各項を占めて居ると云ふやうな有様であるが、是は決して有難い日出度い國と言ふことは出來ぬと思ふ。少くとも理想的國家といふ譯には行かぬ。

(二) 天地本來の國家の理と唯我一人の如來

それで自然の趨勢上已むを得ぬのもあらうが、是等の國をズーツと見渡しで見ると、どうしても國と云ふものは滅びる運命を持つて居るやうである、そこでルーズベルトなどは斯う云ふことを言つて居る、『國か偉いとか大きいとか云ふのは、詰り其國が盛であつた間に善い事を多くして、人類の進歩に大なる貢獻をした國で之を偉大なる國といふのである、國は必ず滅びるものであるから、生きて居る間に大きな事をした國が大きな國である』と言つて居る、是は無理もないことである。併し果して是が本統であらうか、國と云ふものが打建てられた以上は必ず滅亡するに相違ない、總べて造つた物は壞はれるに相違ない、始まつたものは必ず終るに相違ないが、此初めと終りとの間に必ず大争亂が起るけれども之が果して本統の意味を以て此世界の平和を維持すると云ふことには適當であらうか、一體皆が集つて少しの事は忍び合つて睦しく一國を成すといふことは平和を得んが爲めである。然るに斯う云ふやうに根底より打崩されることがなければならぬと云ふ仕組であつたならば、其國と云ふものは果

して本統の國と言ふことが出来るであらうか、確に是は理想的の國家ではないと云ふことを斷言し得るであらうと私は思ふ。そこでどうかしてさう云ふことの無い未來永劫平和であると云ふ國があつたならば見付けたいものである。どうしたならばさう云ふ國が出来るか、是はなか／＼むづかしい、一家内でさへもさう長い間平和を保つことは出来ないで始終ゴタ／＼して居る、併し家の中でゴタ／＼して居つても根柢から崩れることはない、根柢から家の革命と云ふやうな事は無い、兄弟喧嘩や夫婦喧嘩を致しました所が、其喧嘩が極度に達して一家族が根柢より崩れると云ふ事は無い。是は何の爲めであるかと云ふと、家の人が銘々自分の勝手な事ばかり言つて居つたならば、逆も平和などと云ふことは出来るものではないのであつて、同じ菜でも俺は西洋料理を喰ひたいと言ふと、他の人は香の物で茶漬を喰ひたいと云ふやうに、お互に始終我儘を言つて居つては逆も旨く行くものではないが、自分を犠牲にすると云ふと可笑しい

が自分の喰ひたい物を我慢すると云ふやうに、お互に我慢の仕合ひをするると云ふことになる、初めて家と云ふものが平和になつて行くのであるが、主人が一人で威張散らかして居つたのでは逆も平和は維持されない。併ながら家と云ふものは誠に旨く出来て居るものであつて、弟が幾ら強くつても兄を殴き付けて俺が主人であるとは言はない、又子供が幾ら金持でも親を叩付けて親は自分の子であるとは言はない、何と言つても親は親、兄は兄で、どうしても兄や親には頭が上がりぬ、兄の方が學校の成績が悪く金も持つて居らぬ、角力を取ると兄の方が弱いこともある、けれども兄は矢張り兄である。どうして兄は兄、親は親と極つて居るかと云ふと、別に皆が集つて兄を造り親を造つたのではないので、自然々々と兄が居り親が居るのだから、總ての間に平和が行はれて、兄が親の跡を繼いで我儘を言つても、兄だからと云ふので觀念すると同時に兄弟の情愛があるので平和が維持されて居るが、斯う云ふ間に平和と云ふものが、一

國としても亦世界としても出来ないものであらうか、それは出来ないことは決してない屹度出来るものに相違ない、假令出来ないと思ふても決して見縊つて仕舞ふ譯には行かぬ、詰り其處に何とか云ふ一つの統領があつて、其統領の働に依て萬事を判断して行く、其判断者主裁者に對しては、敬虔の態度を以て服従すると云ふ心持を皆で持ちさへすれば宜いのである。併しながらそれは先程申した通り兄を自分で造つたと云ふ風にして推戴したり、俺は力が強いからお前の兄になると無理押付をした形ではいけない、矢張り先天的の兄、先天的の親と云ふのが國に無くてはならぬ、世界にもさう云ふものが現在して居つて其靈徳を慕ふといふ結果でなくてはならぬと云ふことを銘々が考へて、其處に歸依して行つたならば世界の大平和が維持されるやうになりはせぬか。又進で世界が皆んな一所に統一されはせぬか。斯う考へて見ると法華經などは即ちこの意味を表せるものである。是が即ち統一主義で、總ての事の一一致が其處にあるの

である。法華經を讀まれた方は御承知であらう、「此處多^ク諸^ノ患難^ニ唯我一人能^ク爲^スニ救護^ス」とあつて、此世の中は誠にいけない苦しい世の中であるが、而も我れ一人能く之を救ふ、此我一人と云ふのが非常に權威のある言葉であつて、此我一人と云ふことで總ての事が解釋出来るのである、果して然らば此我れ一人と云ふことはどう云ふ意味であるか、此我れ一人といふことを法華經ではどういふ風に解釋して居るかと云ふと、其後に不生不滅の意味を含んだ所の如來であるとして居るかと云ふと、其後に不生不滅の意味を含んだ所の如來であるとして居るか。過去と云ふものをズツと此世界を粉微塵にして小さくしてそれを何千萬哩と云ふやうな處に一粒づゝ置て行つてまだ足りないといふ程向ふであると云ふやうに考へて見ると非常な里數である、其里數の如き前から居るのである。又未來も何時までも居る、過去にも決して生れた譯ではない、從つて未來にも滅びると云ふ意味はない、又過去にも滅んだと云ふ歴史が無いから未來に更に生れて來ると云ふことは無い、天地間の眞理は皆な此通りである。

いろ／＼な事を吾々が今言ふ、それから今世の學者がいろ／＼な道理を發見したやうなことを言つて新しい／＼と能く言はれるが、新しい物などは一つも無い、ズーツと前から有るのを今まで見付出さなかつたのである、盲であつたら見えなかつたのである、盲が目があいて初めて色々のものを見た時には新しいやうに見えるか決して新しい物では無い、眞理は總てさうであると思ふが、其眞理と合致した所のものであつて、それを人格に見たるものが如來様である、此常住不滅と云ふやうな意味を有つて居るお方が如來様である。此如來様が『唯我一人能爲救護』で非常に苦しい穢れた世の中をも救ふ者はどう云ふ方かと云ふと、常住不滅と云ふ意味を有つて居る所の如來であると云ふことを宣言されて居るのであつて、これを稱して絶対位といふべきで、決してそれに對する者は無いのである。

それならば此絶対のものが出で來たならばどうして平和が維持出来るか、此

處が大分むづかしい處であつて、自分ながら説明に苦むので、どうしても言論のみで明白に分らす譯には參らぬのであるが、試に申して見ると斯う云ふことである。絶対と云ふことは何であるか、交渉を絶したことである、相對關係の無いと云ふことである、先づ此處に人間の家があるそれに火を付けやうとしても、燃えない物が間にあつて火を付けたのでは家は燃えない、何故かと云ふと家と火との間に家にも影響が無い火にも影響がないと云ふ物が這入つて居るからである。是は私が能く言ふ譬であるが、風船玉の瓦斯、あれが一番能く分る、硫酸と亞鉛を混ぜると非常な勢で沸騰して風船玉に入る水素瓦斯が出来る、硫酸と亞鉛といふものは非常に仲の悪い物であつて、如何なる處で合せても必ず喧嘩をする、けれどもあの間に硫酸にも侵されない亞鉛からも侵されない所の硝子を間に置くと、今まで幾ら沸騰して居つても各々其處を得て沈靜することになるのである。思想上の争も利害の争も此の通りであつて、利害に些とも關

係の無い人がまアそんな事を言つてはと云ふて仲に入るとチャンと納つて仕舞ふ、けれども其間に少しでも利害關係の有る人でもあると彼はあんな事を言ふけれども、敵方に少し關係が有るからこんな事を言つて調停するのぢやないかと云ふので尙やかましくなる。軍人だから政治の事を言つてはいけませんが、數見る政變だつてさうである、利害關係の無い人が立つて仲裁すれば何でもないが、斯うしたらどうかしやせぬか、あゝしたらどうかしやせぬかと云ふやうな人が國に立つからどうしても八釜しくなるやうなものである。秦の始皇帝が幾ら萬世一系の皇統を考へて見た所が、奈何せん其間には利害がある、滅びるかも知れない所の秦の始皇帝が間に入つたのだから駄目である、是から考へて見ると日本は實に旨く出来て居りませんか、此處まで申上げれば後は言はぬでも能く分る筈である。

(三) 我國と國家主義の理想

それで日本と云ふ國は何時から出来た國であるかと云ふと、日本人はお互に集つて君は偉いから王様になつて呉れと云ふて、天照大神を崇め奉つたと云ふことは少しも無い、又天照大御神がお偉くあらせられて實力が強いから他の人を跳飛ばして天子になれたと云ふやうな様子もない、天照大神は女神で在らせられて、御威容誠に何とも言へない光彩陸離とした立派なお方で在らせられる、又日本の歴史には誰が王様を造つたとかどうだとか云ふことは無い、神代の昔から皇統連綿として傳つて居る、是は何とも言へない尊き所ではないか。外には我國のやうな御國體を有つて居る國は何處にも無い。併し唯それだけでは些と漠として居るから斯う云ふ事を申して見やう、斯う言ふとそんな事をお前は言ふが、銘々の心持が銘々に皆違つて居るのだから一國としても必ずしも

旨く行くものではないぢやないか、どうかすると滅びることが無いとは限らぬではないかと言ふ人があるかも知れぬが、私は決してさうでないとは言はぬ。併し一種崇高な連絡が上と下との間に付いて居るならば誠に立派なもので必ずしも亡滅を豫想するには及ばぬのである。私は今こゝで此間の關係をいふて見様とするのであるが、之を人の精神と身體とで申すと、一體人間は何の爲めに出来て居るであらうかと云ふことは大學者と雖ども恐らくは分るまい、況して學問の出来ない軍人には少しむづかしい問題かも知らぬけれども、兎に角人と云ふものは何事をか爲さんが爲に出来て来たには相違ない即ち自分の精神―自分の心とでも言ふか―此心なるものが何事かは知らぬが何に致せ爲すべき事を爲さんが爲に此身體が出来て来たので、此身體なるものが有るが爲に此心が宿つたのではない、此身體を擁護せんが爲の精神にあらずして、天職を盡さんが爲の身體であると云ふことを私は信するのである、論より證據腕は腕で勝手な

事を言ひ、耳は耳で勝手な事を言ひ、耳は耳の健全にして幸福なるを主張し、腕は腕の自我を主張するが如くに、耳なら耳腕なら腕が自分の利害の爲には何事をも顧みないと云ふ主義を以て立たなければどうであらうか、まるで統一がつかないではないか。然るに各々主心―私は假りにこれを主心と命するが―此主心の支配を受けてそれに絶対の服従を拂つて居つて、若し痛ければ痛いといふとの報告をして、私の處に斯う云ふ物が侵害して参りました、鼓膜なら鼓膜を破りさうにして居りますと頭に知らせてやるが、我慢をしると云ふと破れるまで我慢する、又主心が決心を致して懸りますと自分の身體を粉微塵にしても構はぬ、斯う云ふ風に吾々の目的は此身體を愛護すると云ふのが最後の目的では無いのであつて、吾々の天職を盡さんが爲に身體があるのである、從て自己の天職を盡す爲に進んだ時には身體を微塵にしても構はぬのである。一家でもさうであつて一家の存在の爲には、一家中の者が悉く大困難に遇ふても之に對抗

して意とせぬのである、今のいろ／＼なむづかしい政治家の集りでもさうであつて、自分の黨の存在の意義を完うせんが爲には、黨内の人悉く微塵になつても構はぬと云ふことを非常に賞美する、又さうなくてはならぬ。そこで情意投合とか利害の關係で逃げたりなんかすると變節漢だとか何とか言はれるのである。國家の組織もさうであつて、日本國ならば日本國の存在の意義即其の天職を行ふ爲に進む時は吾々人民が、天皇陛下の御心のまゝに悉く身を粉微塵にしても構はぬ、其時には自分等の身勝手なことを言はぬ、此場合には個人主義などは何の意味もないことになるのである。此道理から考へて見れば、個人の存在は個人主義でなくてはならぬが、國家の存在はどうしても國家主義でなくてはならぬ。個人が個人に捕らはれると云ふのでは困る、一國ならば一國の主義に捕はれ一家ならば一家、一個人ならば一個人の天職の爲に全力を盡すと云ふのが宜いのであつて、此處を能く考へると日本なら日本と云ふものを維持す

るに付ては、人民が悉く粉微塵になつても構はぬと云ふ精神が出て来るであらうと思ふ。そして此精神は何處から出て来るかと云ふと、國なら國を重んずると云ふ所から出で来るので――國家を重んずると云ふ誠心から出で来るので――あるが此國家を重んずる誠心が盛に發達した國家は健全である。世界も其通りであつて世界ならば世界の平和を維持せんが爲には、人數の總てが粉微塵になつても構はぬと云ふ精神が出て來たならばそれは宜いに違いない。

(四) 諸外國に建國の理想ありや

私は歴史家でありませぬから餘り詳しくは分りませぬけれども、段々各國の歴史を見て參ると何處の國でも建國の精神などと云ふ立派なものを有つて居るのは無い。支那は先程も申した通りで建國の精神と認むべきものは何も無い。英吉利はどうかと申すと、英吉利は彼處に居つたブリトン人と云ふ朦朧な人數が

住んで居つたが、其處に外の國民が殖民して來て段々と蔓つて來たので、外の者に來られると自分等の利益が損はれるからといふので共同して後參のものに當ることになり、それに必要な爲に主權者を拵へたのである。希臘の如きも東の地中海海岸に居つた者が殖民をして來て、寄合身上が造られ、銘々があの人此人と云ふ自分等の爲に政事をする人を拵へたのであつて、其處に何等の高尙なる意味は無い。羅馬はどうであるかと云ふと、羅馬の市民が威張出して外の者を征服して大きくなつて來たに過ぎない。佛蘭西、獨逸、露西亞なども同様で立派な建國の精神などは無い様である。バビロン、アッシリヤの如きも何もあつたと云ふことは聞かない、又無いだろと思はれる。それからまだヘブリユ一は何となく日本と同じやうな所がある、此處に基督教のお方が居られるであらうが、其お方は多分御承知であらうと思ふが、舊約の米迦書であつたと思ふ、『末の日に至りてエホバの家の山、諸々の山の嶺に立ち諸々の嶺に越へて高く聳

へ、萬民河の如く之に流れ歸せん』、それから後に、『其劍を鋤に打かへ其鎗を鎌に打かへん、國と國とは劍を擧げて相攻めず、又重ねて戰爭を習はじ』、斯う云ふ宣言がある、殊に面白いのは其後に『エホバシオンの山に於て今より永遠に是が王とならん』と云ふことがあつて、日本と大分何處か似て居る所がある、日本の建國の歴史と大分似て居る、その爲かどうか知らぬけれど、或學者などは日本人はヘブリユ人ぢやないかなど、言つて居るものもあるといふ事であるが、或は其邊から來たのかも知れぬ、けれども私はそれ等は杜撰なことであると思ふ。甚しきに至つてはお差支があるか知らぬが、神功皇后の三韓征伐は伊太利征伐であらうと云ふやうな木村先生などの説もある。併しながらヘブリユ一と云ふのはもう無いのであつて今日迄残て居るのは唯宣言だけである、丁度秦の始皇帝が自分が初めになつて、千年萬年まで永久絶えない所の礎を茲に定めると云ふので始皇帝と名乗つたのと同じことであつて、宣言は立派である

が一向實際が伴はない、斯う云ふものは何にもならぬのである。

(五) 根柢深く而も尊嚴なる我御國體

そこで日本はどうかと云ふとは大分違ふのである。日本の御皇統は武力や富の力の特に高い人が外にあつた所で、代つて立つことは出来ないことになつて居る、盤古三皇より以來定つた姓が無いなど言つて、君となり臣となるは時の勢に従ふのであつて、固く定つたものではないと云ふのが支那の思想であるが、日本では『開闢以來君臣の分定まれり臣を以て君と爲す未だこれ有らず』と云ふので、支那とは大分違つた思想であるが、此違つて居る思想は矢張り建國の精神が主因であつて、此建國の精神が誠に能く續いて來て實際的にそれが證明されて來たと云ふ一つの立派なる事實があるから、吾々の頭の中にも非常に能く浸込んで建國の宣言も立派な宣言として受取られるのである。昨日

まで親不孝の者が明日から親孝行をするから己を親孝行と褒めろと言つた所が、事實がなければ宣言とは認められない、政治家なども近頃ゴタ／＼して居るが皆誠意が無いからで、宣言と實際とは大分違ふ様である。私は學者ではないので不穿鑿に相違ないから、私が申した所が餘りお爲にはならぬかも知らぬが、私の申すのも亦面白味があるかも知れない。そこで先づ日本の建國の様子を拜すると斯うである、搔摘んで申して見ると、昔の神には實際お居でなされた神様と理想上の神様と兩方あるやうであつて、伊弉諾伊弉册尊、天照大御神などは立派な御人格の神様と思はれるけれども、天鳥船神などと云ふ神様はズ／＼と前から何時でも居られる、幾ら長命でも何代も／＼同じ神様が居ると云ふのはひづかしい話である、又天之御中主神の次の高皇產靈神、神皇產靈神と云ふ神様は、天照大御神の時代になつても皇孫降臨の時になつてもちやんと御座るのであつて、是は或は役名か何かの神様に違いない、伊藤さんが死んでも誰が死

んでも總理大臣といふことは残つて居るのであるから、これと同様に考へて見ると天鳥船神は船の神様であつて、其他海の神様もあれば山の神は今でもあるが、兎に角さう云ふ神様がある、それで天照大神の詔などを見ますと、何時でも天照大御神高木の神を以て詔り給はくとあつて、天照大御神が直接に仰せになつたことは少ないのであるが、高木の神は古事記にも書いてある通り高皇産靈神であるが、何時でも此神様を通して詔勅が下るのである、それから天照大御神の時に何か大きな事になると、天_ノ安_ノ河と云ふ處で八百萬神が集つて評議をする、其時には思兼の神をして神ばかりに謀らせ給ふと云ふことがある、是は餘程面白い事であると思ふ、建國以前と申しては可笑しいが、天照大御神以前にはないのであつて、天照大御神の時に初めて顯はれたのである、素盞鳴尊すさのなるみことが亂暴をして天照大神か天岩戸にお隠になつた時からズーッと來て居るので、是は餘程面白い、面白いと言つては恐入るかも知らぬが、私は杜撰ながら斯う

云ふ風に解釋して居る、即ち天照大御神の詔は高木ノ神の副署に依りて何時でも現はれて來る、高木ノ神は神詔を事實にする神様である、さうして事が重大である時には八百萬神の議決を経て、思兼ノ神に神謀らせ給ふて高木ノ神を経て詔勅になつて下るのであつて神代の政事は今よりも一つ立派である。餘り牽強附會とお笑になるか知らぬが、天の安ノ河と云ふのは今で言へば日比谷であつて、天照大御神は何か重大があると高木ノ神をして八百萬神を天_ノ安_ノ河に集まらせて、其議決に依て出來たものを御用ひになつて居給ひたのである。思兼ノ神は今言へば樞密院であるが、さう云ふ處で更に吟味をさせて、又元に歸つて天照大御神から高木ノ神即ち總理大臣とか内閣とか云ふものを通じて御詔勅が出ると云ふので、實に立派なもので、是が御國の萬々歳である所以であらうと思ふのである。つまり上御一人の御考では無い、多くの心を以て心とされ而も出る所は極めて高い所の詔勅として下さるのである。誠に今の有様と能

く似て居りはせんかと私は思ふのである。天の岩戸にお隠になつた事に付て私が平素から不都合なことを考へて居ることがある、能く申す事であるからお聞きになつた方もあるかも知れぬけれど、或宗教の經典に『日之神と云ふは天照大御神、月之神と云ふは素盞鳴尊なり、兄弟互に日本國を取らんと争ひ給ひけるに、伊弉諾伊弉册之を鎮めん爲め天より降り給ふを以て、天照大御神は親に會ひ奉らじとて天の岩戸を引きて引籠らせ給へば』と云ふことを言つて居る、こんな思想を持つて居る宗教がある、こんな不都合な事はない、斯ふ云ふものが立派な經典として出て居ると云ふのは實に怪しからぬことである。餘り攻撃しては何ですから是だけに止めるが、それで又前に戻つて、殊に天照大御神の御心の御様子が拜せられるのは鏡であつて、皇孫三尊を降し給ふ時に、『天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齊鏡寶祚之隆當與天壤無窮者矣』といふので皇孫に鏡をお渡しになつた『與同床共殿』と云ふので、平生何時でも、御一緒に持つて居らなければならぬのである。そして自分を視る如くに思つて肌身を離してはならぬと云ふお言葉を下された此鏡と云ふものは、日本國の天皇陛下が吾々臣民をお治め遊ばす時に於て、此上もなく尊むべき道具である。鏡と云ふものはどう云ふ物であるか、申すまでもなく鏡は立派な物である美しい物であるのみならず、鏡と云ふ物は何でも映す物であつて、何等の好嫌もせぬ物である、何を映してもチャント映る、併ながら少しでも執着はしない、總ての物に没交渉である總ての物に絶對である、美しい顔を持つて行けば美しい顔が映る醜い顔を持つて行けば醜い顔が映る、能く私の言ふ例であるが、皆さんの鼻の先に何か附て居つた時に鏡に向ふと、自分の顔に何か付て居ると云ふことが顯々と分る、そこではならぬ、そんな汚いことではならぬと云ふので、拭取つて見、拭取つては又見て穢いものが無くならなければ承知しない、けれども鏡の中から手を出してお

根柢深く而も尊嚴なる我御國體

前の鼻の先は汚れて居るからと云ふて拭いて呉れはしない、其處が甚だ味ふべき所であつて、吾々か明鏡に對する心を以て天子様を拜しますと自分の心の汚さが皆な現はれて來るから、是では誠に相濟まぬと云ふので汚い心を捨て、仕舞ふのであつて、決して天子様が斯うしてはならぬあゝしてはならぬと一々御指圖はなさらぬ、外の國の天子はあゝせい斯うせいと云ふので、一々御自分の心で判斷するが、天照大御神は先刻も申上げたる通りにあらせらるゝので、恐れながら、先帝陛下も 今上陛下も同様で在らせられる、それであればこそ日本の天子様の御徳は決して汚れぬのである、鏡にどんな汚い物を映しても鏡は汚れない、其鏡の徳を以て日本をお治め遊ばされるから知召すと云ふのであつて、知召すと云ふことは御承知であらせられるといふことである。簡單にいふて見ると、鏡のやうな明德を以て天の下を知召すと云ふのであつて、建國の御神勅として下されたのは、高御産巢日の神、天照大御神の命を以て天ノ安

ノ河原に八百萬の神を神集に集へて、思兼ノ神に思はしめて詔り給はく「此葦原ノ中國は我御子の知さむ國と言依賜ふ」斯う云ふやうに初めから出來て居るのであつて、神聖の意味も此點に胚胎するので萬代不朽もこゝから發現するのである、要するに總ての事に常住不滅の意味を有つた御皇統であらせられるから、御皇統から御覽なさる時には何の黨派もない絶對であらせらるゝ、此意味合が日本に有ればこそ日本と云ふものは此通り立派なのであるが、外に斯う云ふ處が何處にあるかと云ふと、ヘブリユウには宣言だけは有るが昔の歴史は今は無いのであつて、こゝにいふ立派な御國柄は、日本より外には無いのである。

(六) 天立天統にして神聖なる君主

前にも申し述たる通り、親や兄は初めから親兄である、弟や子供がいくらエラクとも如何ともすることの出來るものではない、代つて見たいと云つても代

ることは出来ないものである、どんなに富んで居つてもどんなに腕力があつてもどんなに學問があつても子を親とすることは出来ぬものである。若しさうでなくして一家内の中で力があるとか富んで居るとか智慧があるとか云ふやうな意味合で、親になつたり兄にならうとしたりして争ひが始まつたならば、私ぐえらひからして私が旦那様になると云うて争ふやうなことがあつては、家の中は逆も纏りが付くものではない、一家の争ひはどうしても絶えない、國家も矢張り其通りであつて、富める者、力ある者、徳のある者、學問のある者と云ふ工合に、さう云ふ人がお互に王様になると云ふことを争ふやうなことでは、一國內の搔動は絶えるものではない。是等の争ひの端を絶して仕舞はなければ平和を永久に保持することは出来ない。斯う云ふ争ひの出来やう筈もない所の天然自然の主宰者があつてこそ、始めて其主宰者に神聖の意味合が出て來るのであつて、是れでこそ初めて永久に平和の保護者である、斯う云ふ意味から推廣

めて參つたならば、世界の大平和を維持する場合に、世界の大平和の主宰者となる所の方はどう云ふ方であるかと云ふと、今のやうな意味合を以て居る所の天然の主宰者でなければならぬのである。是は人爲では出来ない、堯舜が幾らえらくとも此位に即くことは出来ない、陶朱公が幾ら富んでも、武藏坊辨慶が幾ら強くともさう云ふことになることは出来ぬのである。如何なる人でもなりたくてなれるものではない、例ひ人が一時推戴した所が推戴しなくなればそれだけのことであるから、どうしてもさう云ふ意味で出来上つた所の出来合の主宰者であつたならば、永遠に平和を維持し得べき主宰者たることは出来ぬ。どうしても天來の統を萬世に垂れて、明かに君臣の分定り、初めから統治者と被統治者と定まつて居る者でなければ争ひと云ふものは絶えない道理である、どうしてもさう見なければならぬ、是は昔からさう云ふ意味に心付いた人はある。秦の始皇などが二世三世より萬世に至り、之を無窮に傳へんと言つたのである

が、これは決して威張ばかりではない、禪讓討伐有徳作王と云ふやうな事では迎も行かないと云ふことを考へて、どうしても此皇統を萬世に傳へなければならぬと云ふことを秦の始皇も考へたのであらう、併ながら秦の治世は其時に出來たのであるから出來た時から滅亡の運命を伴ふので決して長持はしない、歴史の示す如く直ぐに亡びて仕舞つた。事實に於て擁立の義があつたり篡奪の義があつたりした日には迎も收まりがつかない、それでは神聖の意味などは迎もないのである。私は國家學のことに就ては造詣が浅いのである、から學者から笑はれるかも知れぬが、聞く所に依ると君王國と云ふものは民主政治の國よりも割合に永く繼續し争亂もまた少いと云ふことである、況や此君主に對して争ひがないと云ふことに定つて居る以上は長き平和を求め得るは自然の結果である。もしそれ天來の靈徳嚴然として備はり、いつでも天來の神徳を以て御鑑臨まします所の主宰者があつて利害を絶したる裁斷を仰くことを得たならば、是

は實に理想的國家と云ふものではあるまいか。今まで色々の國家學者が妙な點までずつと研究して居るが、併し此立派な所の國體あるを知らないで居る、斯の如き天來の、争ひのない君主が主宰して居る所の國ぐらゐ立派な國はない、是は理想的の國家であると云ふことを知らないで居る所の國家學者が多いのである。スタイン先生のごときは我國を大層景慕された、是は無理のないことである、下が上となることは宜しくない、主宰者が下に居ると云ふ即ち民主と云ふ意味合が擴がつて來ると、詰り昔の支那の歴史にもあつた通り、臣を以て君を弑して代るなど云ふことにもなる、恩を受けた家來か自分の主人が暴虐であると云つて之を廢して己れが代ると云ふやうなことが出來るのである、斯くの如きことは誠に不祥なことである。日本を除ける、外國ではさう云ふ有様になつて居るが誠に可哀想なことである。どうしても理想的の國家にしてやりたものである、第一ちよつと讓つて考へて見ても、今日流行の民主國なるもの

はどう云ふものかと言ふたならば、何でも物を主宰するには理窟では行けない、何とも言へない威嚴がなければならぬ、神聖の意味がなければならぬ、然るに人民が推戴した所のものには神聖の意味はない、色々の國に憲法でも其君主には神聖と云ふ意味を含めてあるのであるが、よく煎じつめて見れば決して神聖とは言へない、どうしても人の作つたものである、作つたものに神聖があらう筈はない、吾々はよく是等の意味合のことを會得して、我國の如き國體を世界の各方面に知らせ、斯の如き立派な國體を讃仰景慕せしめ、さうして世界の大平和を得るやうに努めなければならぬ。是は吾々日本國民の第一の務めてあつて又動かす可らざる目的である。吾々は此吾々の存在の意味、乃ち世の中に生れて居るものは、此大任務に向つて進まんが爲であると信じて居るのである。何も朝晩に御飯を食べてさうして寢床に這入るのが目的ではない、吾々は此大事業を持つて居る所の國民である。

(七) 我國民の資格

吾々は以上の如き重大なる責務を有するものであるが吾々には果してそれだけの資格があるであらうか、そこで吾々は先づ第一に吾々國民はどう云ふ國民であるか、日本國民はどう云ふ資格を具有する國民であらうか、南瓜の蔓には南瓜しか生らぬのであるから、自分の先祖以來果して是だけの任務を行ひ之を貫徹するだけの資格が親にあつたであらうか、吾々子孫にそれだけの望みがあるであらうかと云ふ疑問を先第一に解決しようと思ふのであるが、吾々國民は日本國の如き立派な御國に居りながら此御國の如く莊嚴極まる所の立派な御國柄が世界の他の方面には決してないと云ふことを知らずに居るのである。是は誠に無理のない話である、吾々は空氣の中に棲息して空氣のあることを知らない、魚は水の中に居つて水のあることを知らずに居る、それと同じことで吾々

は立派な國家の中に棲息して居るけれども、此自分の居る所の國の立派さを知らずに居ると云ふ鹽梅であるから自分の肩にさう云ふ大任務が有るか無いかと云ふことも亦氣が付かずに居るのも無理のない話である。併し能く考へて見ると日本人は妙な國民である、非常に吸收力と消化力とに富んで居る所の國民である、此一つだけでも餘程偉大なる國民とすることが出来るだらう。昔からの思想を見ると古來の思想に就ては、死ぬと云ふやうな思想は昔には無い、面白い國民である、餘程大きいのです、唯居なくなつて何所かへ隠れるとさう云ふのである、古典にも隠りますと書いてある。天子様などは天にお出でになりまして天を知し召す即ち天に御遷坐遊ばされたと云ふことに過ぎない意味になつて居る、決して六道の餓鬼とか地獄と云ふあゝ云ふ苦しい所に行くと云ふやうな意味合は少しもない、未來と云ふものに對しては極めて清淨なる思想を持つて居つたのである。そして日本の太古時代に尊んだことは禊と云ふことゝ宇氣

比と云ふことである。宇氣比と云ふことは心の中で決して疑ひがない、決して何年も疑はない真心であると云ふことを示す所の一つの法式である。禊と云ふのは自分の體の汚れを總て祓ひ落とすと云ふことで、之を神靈と結付けて考へて居るのである、是は如何にも立派な思想であらうと思ふ。宇氣比といふのは真心を披瀝する意味で決して人を欺かないと云ふことを證據立てる所の、證明でそれが爲には熱湯に手を入れても決して怖れぬと云ふのである。それから自分の心身に何か悪いことがあるといふと直に水をかぶつて總て身心を清淨にするのである、鏡に對して自分の顔を見れば、自分の顔が醜いか或は醜くないか或は又妙な顔をして居るか居らぬかと分るのも、總て真心に對して自分の體と心の中を能く清らかにすると云ふことになるのである。是は我が日本人の昔は餘程高尚な考を持つて居たといふ證據で、何事によらず極めて簡單で而も高尚である。是が若しずつと續いたならば、何の禍もない、むづかしい法律も

要らないしむづかしい宗教も要らないで済むのである、けれども段々世の中と云ふものは進むに従ひて悪いことも進んで參るものであつて、段々世の中がせち辛くなつて來たのである。

(八) 外來思想の影響ノ一、儒教

外來の思想としては儒教が第一に參つた、應神天皇の御代に參つたと云ふことに歴史の上ではなつて居るが、もつと前に參つたに相違ないのである。それは私は考古學者でないから言ひました所が證ないことではあるが、遅くとも崇神天皇の御時代には來て居たに相違ないのである。仲哀天皇の時代にはもう彼地と相當の交通があつたと云ふことを證據立てられるのである。何に致せ應神天皇以前とは思ふがマア應神天皇時代としても宜しい、其邊のことは歴史の證索が目的でないから宜いとしてをく。さて應神天皇の時代に漢學が參つて、論

語千字文が來て菟道稚郎子ウチノチロキミといふお方などが出られたので學問が大分盛んになつて、皇位の御繼承にすら道義の議論が出るようになった。それより以前は天皇の仰せであれば議論を挿むが如きことは決してあるべからざる教であつたが漢學思想が這入つて來ると、長幼の序などを立てやかましく云ふ様になりとうとう天子の位を譲り合つて、どつちにもこつちにも付かず三年もたつたのであるから人民が泣き出した。貢の物を上つるのに宇治の御所に參りますと難波へ行けと言ひ難波へ參りますと此所ではない向ふへ持つて行けと云つたといふ如き事實を生ずるに至つたのである。是れ道徳上如何にも美しく見えますが、天位の繼承の意味から見れば絶對にして神聖なる事の意味が何となく曇つた様に見えるのである。既に絶對神聖である以上は長幼の序とか何とかやかましい議論を挿むべきものではないが、世の中の變遷に従ひ、こう云ふ事が出來て來て段々世の中も錯雜になつて來たのである。

(九) 其二、初期渡來の佛教

其處へ又佛教が參つて來た、えらい廣告で以て來たのである。此法は諸法中の一番優れたもので、周公も孔子も知らない貴い法である、此法は無量無邊の功德があつて無上菩提を得るのである、どんな事でもお願いすれば成就する、祈願が乞ひの儘に乏しき所なく、どんな事でも出来るものだ、斯う云ふ廣告で日本に這入り込んで來たのである。斯う云ふ廣告で參つたから、最初日本へ參つた佛教は決して未來教ではなく現世教であつたのである、立派な現世教であつたのである、餘り現世過ぎて困つた位であつたのである。現世と云ふことの證據は澤山あるのであるが、例へば父母も子も功德に乗じて現身安穩にと云ふやうなことを書いて居るものもある、又父母の爲に金銅の御釋迦様を作つて、此功德に依て現身が安穩であるやうにと云ふやうに書いたものもある、陽明天皇

の御代にも陽明天皇御自身も、又蘇我馬子なども病氣が治る爲に願つて、孝極天皇の御代にも雨乞をした、佛法は現世の幸福を祈らんが爲と云ふのは非常に多いのである。現世と云ふことは後には惡い弊が澤山出來たのである、それは已むを得ぬことで一時は面白い歌などもある、大伴旅人の歌であるが

此世にし楽しくあれば來ん世には

虫に鳥にも我はならばや

此世さへ嬉しく暮せば來世は虫になつても鳥になつても構はぬ、兎に角さう云ふのであつた。それであるから現世の執着熱が盛んになつて參つて何とも仕方がなくなつた、併し此現世と云ふことの爲に色々の事が出て來て、詰り行基菩薩なんと云ふお方が出て、歩く所に隨つて渡船を造つたり道を造つたり橋を架けたり港を開いたり、有馬の温泉なども開かれたと云ふことである、眞偽は知らぬがさう承はつて居るが、そんなやうな工合で到る處さう云ふ救濟事業社會

事業をどん／＼やつたのである、さうして活佛とか何とか言はれて先生御自分では大變に大得意になりすまして居つた。其時分殆ど未來を恐るゝと云ふ意味の信仰はない、何でも御願ひをして治して戴くと云ふので御願ひとか御祈りとかいふことばかりやつて居たのである。さう云ふ工合であるから諸君の御承知の如く玄昉と云ふやうな破戒僧が出て來るやうな事になつて、道鏡と云ふやうな不都合な僧侶が出て來ることにもなつた。聖武天皇様でも桓武天皇様でも色々な事を遊ばしましたが、主として現世利益主義である。皆さう云ふ工合である、現世執着熱が誠に烈しい、決して未來をはかなむと云ふやうなさう云ふのではなかつたのである。現世ばかりに執着して仕舞つた所が非常な悪い事をする、誠に相濟まぬ、そこで墮落の極になつたのは道鏡時代であつた。

(一〇) 其三、最澄と空海

それから傳教大師とか弘法大師とか云ふ立派なお方が出て來られたが今度はむづかしいことになつて仕舞つた、議論と學問になつて仕舞つた。非常にむづかしい、其中に又お祈りが始つて役行者など、云ふお方が出て怪力亂神の信仰と共に段々お祈りが盛になる、其甚しきに至つては悪人の爲に善人を呪ふと云ふやうなことが始まつた、丑滿時に嫉妬の深い女が頭の上に蠟燭などをつけてやると云ふやうな事になつた。兎角段々と信仰が墮落して參つて、こう云ふ思想がはびこる事になつて仕舞つた、現世ばかり面白くなつては人間の道德はまるで廢つて仕舞ふのは自然のことである。

(一一) 其四、念佛他力宗

そこで又今度は源空即ち法然上人と云ふ様なお方が出て來て未來教が興つて來た、此世の中は汚いものである、來世は奇麗である、極樂は西方にあつてそ

こには阿彌陀如來が御出になる、そうして其所へはどうして行くかと云ふと彌陀の本願に縋れば行かれるからと云ふことで、それでどん／＼厭世的の思想が出て來た。行基菩薩は聖僧ではあるけれども矢張り一種の土木家みたやうな者である、今なら行基菩薩が工學博士ぐらゐ貰うたか知れぬ、そんな譯で宗教に餘り深い意味合は無かつたかも知れないが、此法然上人が出られてから本當の印度思想が來たんだかも知れない、未來教と云ふものが非常な流行のものとなつた。そこで世間の人は何でも彼でも、南無阿彌陀佛／＼と云ふて阿彌陀様にお縋り申上げると云ふことになつたが、其結果は段々と意外なことになつて來た、假令法然上人にすかさされて念佛して地獄に落ちても更に後悔しては行けない、其故は自分の行を勵んで外の教を頼むよりも念佛を申して後世の報恩をするが宜い、すかさされたと思つて念佛を唱へる、何れの教も及び難き所がある、どうせ吾々の身としては地獄は一定だから安心して念佛を申すが宜い、畢竟信

心の足らざる故と思ふて法然上人に従ふて見ろ、斯う言うて念佛を勧めた。惡るい人を救ふ彌陀の本願だから惡るくても差支ない、寧ろ惡人の方が正しき御縁である、善い事をして極樂へ行くと思ふのは大きな間違である惡るいことをしても地獄へ行かぬやうに阿彌陀様にお縋申すのが本當であると斯う言つたのである。唯々一念に南無阿彌陀佛／＼と唱へさへすればどんな事をしても極樂往生が出来るのだ、さう云ふことにまでなつて來たのである、誠に有難い都合の好い宗旨である、昨日までもこれから後も惡るい事をしても一念發起して謝恩の念佛を勵みさへすればそれで宜いと云ふやうな風に解釋しても差支ないやうなことが澤山言ふてあるのである。是は併し是非もない、今まで現世に執着して居つたのだから其反動が斯う云ふ風になつたのであるからそれは是非もないのである。私は能く御話致すが、法然上人は親切な方で熱病患者にキニエを投じて呉れたのであらう。斯う云ふと坊さんに厭がられますけれども、さ

う云ふ工合で段々厭世教が盛んになつて、其中に禪と云ふ如何にも悟を開いた様な思想になる教が流行して世間の執着を絶つことを教へたので段々と消極的な思想となつたのである。

(一) 其五、儒佛の弊害と日蓮上人法國冥合の主張

所が日蓮上人に至て大に積極的な活動的な一生面を開かれて來たのである。元來佛教の主張は色々あるやうに私は考へる決して厭世教ばかりではない、日蓮上人に至りましては、現世と未來と兩方を融合した教になつたのであつて、教と云ふものは此所に至つて大成したのであらうと思ふが、元來佛教と雖も決して現世を厭ふのではない、佛教の中にこういふ思想もあると云ふに過ぎぬのである。兎に角日本に來た所の佛教はさう云ふ風に變化して來て居る。儒教も矢張りさうである、論語千字文渡來の時代から段々變つて來てとう／＼本當の

忠孝主義になつた、孔子様も道を唱へられたけれども、吾々の謂ふ道と孔子様の謂ふ道とは其の究竟は一本になるに相違ないが其の道中が違つて居るだらうと思ふ。儒教の一番の元は禮樂であつて忠孝主義のことはさう澤山ない、孝の方はあるけれども忠と云ふことの意味は、日本で謂ふやうな忠の意味とは違つて居る、唯まめやかで眞心を以て盡すと云ふことを忠だと云ふやうに止めたことが多いのであつて、日本に參つてから本當に變つて來たのである。併し儒教徒も中々惡い事はして居る、蘇我馬子が弑逆を企てる時なども、蘇我馬子に同意して寧ろ主導者となつた者は儒者であつた、これは支那から歸化した人間であるけれども誠に不都合である、儒佛相聯合して日本の古俗擁護者を亡したのである。さうして見れば儒者も誠に面白くない事をやつて居る、孔子様は徳のある人は王となると云ふ意味を十分に傳へて居られるけれども、是は御自分でも決して本當だと思つて居られない、本當だと思はない證據には、周の祀を

千萬載に傳へると云ふことを考へたので分るけれども、それは到底駄目である。周と云ふものはどうして起きたかと言つたならばさきに申上げた通り、誠に汚い所の動機から起きた所の王道であるから、此汚いものを萬世に傳へると云ふことはむづかしい譯である、周の王道は少くも神聖の意味あつて起きた所のものではないのである、有徳だからと云つて起きたのである。而かも其の實は強力を以て王となつたのである、是では永く持たぬ筈である。孔子様は支那に生れたから幾ら研究して考へられた所が、天來の君主を奉戴する國に生れて居らぬのだから幾ら御考へになつた所が周の祭を後まで遺さうと言はるゝ外はないので、それとても出來やう筈はない。此點は誠に同情の至りで、聖人に同情と言つてはおかしいが、日本のやうな國に御生れになつたならば非常に御悦びになつたらうと思ふ、國が其國でないから本當の教を立てることは出來ないのである。漢學も日本に來て大成しそれから佛教も日本に來て大成すると云ふ

のは故ある事である。而して日蓮上人に依て國と法との結び付けが行はれまして、王佛一如、法國冥合と云ふ主張に立たれたといふのは誠に御國柄の致す所である。日蓮上人もさう言つては惡るいけれども支那か天竺かに御生れになつたならば、あのやうな雄大な御主張が出來たかどうかと云ふことは疑問である。吾々のやうな詰らぬ者でも日本國に生れて來たればこそ、孔子様が何だ彼だと言ふことが出来るのである、誠に嬉しい次第で日本人にあらずんば、此思想が浮んでは來ないのである、之を考へると誠に愉快に堪へぬのである。

(一三) 消化力に富める日本

それでさう云ふ工合に色々なものが日本に來て日本化したのでありますが、日本も初めの内は鵜呑であつたのである。日本には大分鵜呑をする癖がある、漢學が來れば直ぐ鵜呑にして仕舞ひ、佛教が來れば直ぐ鵜呑にして仕舞ひ西洋

の學問が來れば直ぐ鵜呑にして仕舞ふ。日本のことを研究するに西洋のことを言はなくては分らぬやうになつて來る、鵜呑にするからして齒は日本國民に餘りないけれども胃が大變に宜しうございます、咀嚼するよりも消化作用が大變に宜い、無論相當に咀嚼しはすけれども、總てのものが日本に來ると日本の御國體に合ふやうになつて來る。佛教でも本地垂迹とか云ふやうになつて、迎合的の意味にもせよ、日本の御國體と合ふやうにして來る。それから又儒教の方でも向ふの有徳王となると云ふやうな主義は無くなつて、日本の忠孝主義となり、有徳なれば王となると云ふやうなことは嚏にも出さない、何所までも忠孝本位になつて仕舞ふ。此邊の所が誠に面白い、色々の方面からさう云ふことを考へて見ても何でもさうである、何所の國でも幾分かこの意味は行はれる、他の國から參れば其國の風に自然に染みるのは當り前のことである、併し日本の如く換骨奪胎して仕舞ふ所の國は少いだらうと思ふ。それであるから此點から

見ても日本は大變にえらいと云ふことになるのである。是だけの吸収力のあるものは誠に少いのであるからして、此點だけでもえらいやうに見える。併し日本は果して是がえらいからと云ふことになるかと云ふと、もう一つ考へて見る必要がある、それよりちよつと斯う云ふことを言へば分る、日本のえらいのは日本は未だ曾て一遍でもお師匠さんとなつたことのない國である、いつでもお弟子である、是は御考へになれば直ぐ分るのである、消化作用は宜しいが今まで一遍でも師匠になつたことはない、漢學は朝鮮から來て朝鮮文明が傳はつて來た、支那の文明が來る、印度の文明が來る、西洋の文明が來る、いつでも外國の學問をひどく尊敬する、いつでも師匠としてそれを容れるのである。けれども朝鮮の學問が來ると直ぐ朝鮮の學問を採つて朝鮮よりもえらくなり、佛教を受ければ直に消化して仕舞つて、佛教それ自身の眞髓を見出して佛教國よりもえらくなる、それからまた西洋の學問が來ればどうであるか、今は西洋の學問

を盛んに吸収して居る所であるから、未だ之を吸収して仕舞つて西洋よりえらくなつたとは言へないが、直ぐえらくなるであらうと思ふ。吾々子孫も祖先の様にえらいならば、此所に至つて日本が始めて大先生になるのである。いつても他の國の教を尊敬するからしてそれを能く呑み込むのである、昔からえらい先生達が皆さうである。日蓮上人でもどんな博士でもちよつと何所からか聞いたばかりでお師匠さんになつたならば小學校の先生にも不十分である、何遍も弟子になつて何所に行つても弟子である、さうして最後に大きな師匠になるのでなければ大先生とはなれぬのである。此面影を日本が備へて居る、是は非常に愉快なことではないか、日本は此意味合を確に持つて居る、色々のものをみんな師匠として尊敬して聽く、尊敬するから能く其真髓を傳へるのである、然る後に覺つて一步先きへ進むのである。さう言つては惡いかも知れぬが西洋ではさうでない、少くとも東洋文明に對しては初めから輕蔑して掛かる、東洋

文明何者ぞと云ふ考でやる、物を輕蔑しては真髓を得られるものではない、氣が付いても遅蒔きである、西洋人は日本の文明の進歩が早いとか何とか言ふけれども何も別段に早いわけではない、すつと前から立派に養はれて來たのである。私は常に能く言ふのであるが、孔子さんが老聃らうたんに道を聞いたと同じことである。さう云ふやうなものであつて日本人は總て何事に依らず攝取し、それを包容し消化し換骨奪胎して自分のものとして行くのである、一之を吾々は醇化作用と言ふて居る―斯う云ふ作用を致す國民と云ふものは何とも言へない所の立派なものではなからうか、是は非常に立派なものであると私は考へるのである。

(一四) 我國民と奉公の精神

以上の如く立派なものであるけれども、併し之のみでは永遠に國を維持して

行く譯には行かない、維持することが出来なければ亡びるのである、亡ぶればもう神聖の意味はないのである。不生不滅を常住不滅と云ふ意味がなくなるのであるから、世界の人類が如何に日本のやうな立派な、神代よりこのかた君臣の分定まつて最高主宰者に向つて何等の争ひがない、何とも言へない莊嚴な國を尋ね出さうと思ふてももう無くなつて仕舞ふ、日本だけがたつた一つ嚴存して居るので何所を尋ねたつても外にはありはしない。他の國はどうしても日本のやうな國でなくてはならぬと云ふことになつて日本に歸依して來る、この點から見れば世界の平和の爲め、どうしても日本を守つて行かなくてはならぬ、吾々が自分の體を大切にするよりも更に以上に大切に守つて行かなければならぬことになる。話に聞きますと小さな細胞でも滋養分を取る所の細胞は滋養分を取ると自分が疲れて死ぬまで目的の所へ持つて行つて届けて死ぬと云ふことである、是は細胞を研究する學者に聞くと其通りだと云ふことである、

さうして幾ら腹が空いても、持つて行くまで自分で食つて仕舞ふと云ふことはしない、所謂摘み食はしないのである。諸君は果して如何ですか、極小さな無意識な細胞がそれである、つまり義勇公に奉ずると云ふことは即ちこれである、此義勇公に奉ずると云ふやうな所の觀念が日本に無ければ、幾ら物を咀嚼してえらい人民になつた所が駄目である、此義勇公に奉じてさうして御國の爲には體を粉微塵にしても構はぬと云ふ、さう云ふ一つの決定的觀念がなければならぬ、而かも其意味合は日本人獨得の忠の字であるに相違ない。此忠の字のことに就ては昔から大分立派な例が日本には著く多いのである。總て日本では自分のことよりも自分の相手を大切に考へる、それは古代史にある須勢理媛と大國主神のことなどでも分つて居ります、戀歌のやうなものであるけれども、古歌などに誠に味ひの深いやうに思はれるのが澤山ある、『我がせこの歸り來まさん時のため命のこさん忘れ給ふな』自分の生きて居るのは自分の夫の歸り來るま

で待つて居る爲である、何にも外に考は無いのである、誠の愛と云ふものは自分の身を苦しむことなどを構はないのである、自分の愛する人の爲になることならば如何に苦んでも宜しい、例へば此所に若い方が婚禮しやうと思ふ、其時に自分の身に恥づべき事があると云ふと、或は自分の身と向ふの方と一緒にないと向ふの方に累を及ぼす、禍わざはひになるだらうと考へた場合には、自分の切ない情を棄て、さうして向ふの人が他の人と結婚するのを涙ながらに嬉しく思ふと云ふ、其所に本當の愛と云ふものがある、日本國民の愛と云ふものは自分を捨てゝの愛であるから其所に行くのである、其心持が天地にも傳はり人にも傳はり、上御一人にも參るのである。此所が本當の道である之は實に美しいものと云はねばならぬ、自分の欲を満足する爲にする愛ではない、己れの愛する人が幸福でありさへすれば宜い、自分はどうでも構はぬ、其所に至らなければ本當の愛ではない。忠もさうである、自分の出世なんかどうでも宜しい、御奉公の

ことが立派に參りさへすれば宜いのである、それが本當の忠である、自分の出世を考へるやうなことでは行けないのである。其所の様子をうたつた歌がある、是は誠に味のある歌であるが、鹿に譬へて言ふたのである、乞食が詠んだとしてあるが萬葉に

『佐男鹿くまがの來立きたたち咲さかく頓とんに吾は死へしおほさみに吾は仕へん吾角は御笠のはやし吾耳は御墨のつぼ吾自らはますみの鏡吾爪は御弓のゆはず吾毛は御筆のはやし吾皮は御箱の皮に吾肉は御なますはやし吾美義みぎは御鹽みのはかし老はてぬ吾身一つに七重花さく八重花さく白しはやさね白しはやさね』

といふのがある、自分の身を捨てゝも此通りになつて悦ばしいと云ふ、さう云ふことの意味を言ふたのである。それから是大伴家の有名な歌であるが、『海行かば水漬く屍山行かば草蒸す屍大君の邊にこそ死なめ徒には死なじ』と云ふ歌もあります。其他誠に好い味ひを現はして居るものが澤山ある『物の部の臣

のをの子は大君のまけのまに／＼とふものぞ』今日よりは願みなくて大君の魂のお楯と出て立つ吾れは』或はまた君の爲には身をば思はじとか千萬の軍なりとも、言あけせずとか、其他忠義の眞情を發揮したものが澤山あるのである。

(一五) 敢て稱す日本人は化學的國民なりと

以上の次第で日本人の心には忠義と云ふことが充分にしみ込んで居るが、それはどう云ふ所から來て居るか云ふと、勿論御皇統の御靈徳に感激しつゝ、養ひ來たには相違ないが、今申したる通り自分と云ふことの考を餘り先立てないと云ふことから來て居るのであつて、誠に美しい立派な考がもとなつて居るのである。是等のものはどう云ふのかと云ふと自分の性質即個性を滅盡して居る、自分といふ思想が無くなつても働かなければそれつ切りだが個性をなくすると同時に更に熱烈な働きとなつて顯れるので、是は日本人の特性である。分

り宜いから私は始終言ふのであるが、日本國民の性質はどうしても個人的ではない、此頃は個人主義が大變はやり、甚しきに至つては半獸主義なんと云ふほどのがあるさうであるけれども、日本人の元來はさう云ふ國民ではない、誠に自分の身を犠牲にすることを少しも構はない所の國民である。私は之を譬へて化學的の國民だと言ふて居る、化學作用のやうな國民である、粒々して成立つた國民を理學的國民と私は勝手に名を付けて居る、つまり金銀とか銅とか粒々が相集つて居るのである、理學的作用に依つて結合した國民である、化學的國民はさうではないで譬へば水のやうなものだ、水と云ふやつは酸素と水素の化合物だ、此化合物なるものはどう云ふものかと言ふと、酸素それ自身は火をつければぼつと燃える性質を持て居る、けれども水の中に火を入れればデューと消へて仕舞ふ、酸素の性質は少しも見えて居らない、又水素と云ふものは火をつくれば青いやうな火を出して燃へるものであるが、水の中に燐寸を摺つて入

れても燃へはしない、水素の性質は少しも見えて居らない、酸素も水素も水となつた以上は其性質を現はさない、其水になる各個々の性質は悉く亡びて仕舞つて居る。併し能く御覽なさい、水と云ふものの中にある酸素は酸素としての働きを十分に盡して居る、又盡さなければ水でない、水素は水素で水素の職分を十分に盡して居る、唯自分の我儘の酸素としてなり水素としてなりの性質を水となつた以上は現はさないのである。さうであるから日本の國民は身を顧みずして君國の爲に働きます、國家の爲になれば自分の利害などは思はない、自分と云ふ考が無くなる、此立派な思想が無くては日本は立たぬのである。そんならば其考がどうして日本人に出来たか、酸素と水素と一緒になつた所が決して水になりはしない、其所へ一つの電氣を掛けなくては行かぬ電氣を掛けると水になる、日本國民にも何物か作用するものがあつて今のやうな風になつて居る。是即ち惟神の靈徳即ち天子様の靈徳にあるので、之を私は御稜威と思ふて

居る、此御稜威の作用に依て日本國民が化學的國民の全能を盡して居る。併しそれを粒々に離せば酸素の性質を備へて居る、銘々が孤立すると酸素の働きをする離せばちやんと水素であると云ふことの意味合は明かに現はしつゝ、國民としては自分達の利害は何にも考へて居ない、斯う云ふ國民である。是は誠に立派な國民である、吾々は之を何處までも養はなければならぬと思ふ、自分一個として立つて來た時分にはそんなことは要らないであらう、けれども吾々の此體が一つの聯合的の任務があつて、其精神の任務を行はんが爲に此體があるのであつて、此體を健全ならしむるのが必しも吾々の希望の全部ではない、さう云ふことを考へて見ると、どうしても日本のやうな風でなくては行かぬのである。指は指、足は足、銘々勝手のもものが集つて出來て居るけれども、その活動を命ずる所のものは何かと言つたならば、銘々の相談で出來た所のものでなくして天降つた所の靈魂である、我日本としては御稜威である。自分の個性

的性能を捨て何事をか御奉公すると斯う云ふのである、それが無くては何にもならないのである、日本の國民と云ふものは此吾々の體の出來上つたと同じ意味である。他の國のは皆さうでないやうに私は信ずる、勝手次第に自分等の好む儘に造つたのである、勝手次第ではないけれども、銘々の手や足の痛を救はんが爲に指に繻帶を巻いてやると云ふ方で、つまり各々の幸福を主として出來たのであり従て指なら指手なら手自身の我れを何所までも忘れぬのであるから、動もすると自分の不幸を怖れて國家を忘れると云ふやうなことが、他の國にはあるやうである、日本でも斯う云ふ思想が傳はると西洋のやうになると云ふことは免れないことであるには相違ない。是等の意味合のことはどうしても日本てなくては行かぬだらうと思ふ、是は日本の國民の特性であるから、此特性を發揮して行くと云ふことであつたら、此日本國と云ふものは安泰に永遠に行くてあらう、無論個人々々の意味は尊重して參らなければならぬけれどもいづれも此精神をすつと貫いて參つたならば日本は永遠に日本として益々榮へ行くのであらうと思ふ。

(一六) 忠義を背後にしたる人道

それであるから日本の道徳は何が一番先きかと言へば君國の爲に自分の身を犠牲にすると云ふことである。是ほど立派なことはない、私は艦に乗りまして自分の部下などに對していつでも申すことであるが、何でも總て背後に忠と云ふことがなくては行かない、忠義の忠の字が見へなくては行かない、親に孝行するのでも背後に忠がある孝行でなくては行けない、忠義の意味に外れた所のものは決して孝行ではない。是は日蓮上人などは能く仰せられて居られるのである、即ち自分を非常に可愛がつて居る所の親が朝敵となつたならば、自分は親に孝行せやうと思ふならば其親を棄て、君に奉るのが孝行の至りであると云

ふことを言はれて居るのである、幾ら女が貞と言ふても其貞と云ふことの背後に御國の爲になると云ふ、即ち忠義と云ふ考が無くては駄目である。人と約束したならば必ずそれをやらなければならぬと云ふことは信のやうだけれども實はそうではない、信の背後に忠と云ふ意味合がなれば誠の信とはいひにくいので、萬事斯の如く忠と云ふのが背後に無くては日本の道徳ではないのである、斯の如く立派な心を持つたならば忠義一點張の國民になるのである。此忠義一點張の國民で自分の體を粉微塵にしても陛下の爲に御盡し申上げると云ふ考を以て進んだならば大日本國は萬々歳旭日の昇るが如くいやさかに榮え行くであらうと思ふのである。

(一七) 奢りを斥けて國を富ませよ

けれども實際考へて見ると、幾ら國民に忠義の志があつた所が、若し日本が

まるでぼろ／＼な着物をつけひよろ／＼とよろけて歩く様では仕様がな、世界には力を以て擲り付けると云ふ無法な者もあるから、幾ら聖人君子でも孔子様でもあんなに苦しんだのであらう。日蓮上人は大變えらいけれども北條氏から首の座にまで据へられたのである。日本國は假令此通り偉大でも、十分強くなければ日本國の存在はどうであらうか、如何に立派な國民と雖も此點は考へなければなるまいと思ふ、此點はどうしても餘程注意しなければならぬ、國を富まし兵を強くしなければならぬ。其ことに就ては別段に今申上げる迄もないのであるが、先帝陛下は戊申の詔書に勤儉と云ふことを仰せられて居らるゝ、此勤儉と云ふことは非常に大切なことであつて、軍人に下すつた五箇條の最後の結びにも質素と云ふことを仰つしやつて居らるゝ、貧しくは義勇公に奉じやうと思ふても意に任せぬことも出来るのである。舌長いことであるが私はこの頃調べてがつかりしたことがある、日本はどんなに奢つて居るだらうかと云

ふことに就て非常に悲しむべきことがある。ちよつとそれを申上げて私の講演の終りと致しますが、二十七八年頃の戦さの前から今日までの統計を見ると、我國民は大變しやれるやうになつて來たが、香水はどんなものかと思つて調べると、あの時から見ると七十六倍ほど多くなつた、詰らぬものです、今まで小さな壇でやつて居つたのをビール壇位をぶつかけるやうになつた、こんな香水をぶつかけてどうします、それから化粧石鹼を調べて見ると是も七十倍に近い、一箇月一つ使つて居つたのを一日に二つ半使ふ、こんな様子では迎も行かぬ、絹絲の出る高を見ると二十六年頃から見ると今日は八倍以上も多く使つて居る、是は女ばかりではない皆さんが銘々着て居る。どうも斯う云ふ工合で段段行つたならばどう云ふものであらうか、善いか悪いかは存せぬけれども、國が富んで參るに従つて段々やるのは宜しうございますけれども、國が富むよりは奢りの方が先きである。斯の如くあつては芽出度ことはなかりさうに思ふ

のである。無闇に理窟ばかり言つて實際よりも理窟ばかりで、惡いことしても理窟を付けてえらさうな顔をして居る、萬事不眞面目のやうに見える。吾々が此世の中に生れて居るのは綺羅びやかな事をする爲ではない、自分の此身體は御國體を擁護せんが爲にお預かり申上げてある體であつて、自分の體ではないのだから自分の勝手にしてはならない、叮嚀に維持して參つてさうして御役に立てなくてはならぬ、さう云ふ心持を以て進んだならば自分の體に對する我儘と云ふやうなことも無くならうと思ふて居る。是等のことに就いてはどうも何とも言へない所の教が、日蓮上人の教の中に澤山あるやうに考へるが、吾々も日蓮上人を鑽仰して居る身であるから、之を御縁としてどうか段々に御研鑽に相成るやうに願ひたいのである

(一八) 東西文明の融合と最後の理想の顯現

以上私の申上げたことでも幾らか何か爲になつたことがあつたならば、御互に努めて、さうして此御國の爲に吾々の體を捧げたいものと考へて居る。誠に無理な注文の如くであるけれども、其所に吾々の心の樂しみがある、決して自分の此肉のみが四十年や五十年の間うまい事をして見た所が何にもならぬ、吾々の致す事は吾々の天職の爲にするので、楠正成が湊川に死んだと云ふても正成は死んで居りはしない、今現に生きて働いて居る、楠正成を景慕しこれを追想すると正成公は直に顯前して吾々を教へて下さるのでこの感應と云ふものは正成公が現在御出になると何の違つたことはないのである。吾々も是から國家に貢献する所ありこれを後人に傳へることが出来たならば、其時も今日と同様生きて居るのである、吾々の生命の輝くと輝きのないとは、全く此現在に於て功を樹てると樹てぬとにある。足利尊氏があの時ちよつとの間の榮譽榮華を盡さんが爲に反旗を翻へしたから、逆臣と云ふて三百年も経つてから後で、

木像を河原に引摺出されて首を斬られると云ふやうなことで、誠に氣の毒である、足利尊氏靈があつたならば、隅の方で小さくなつてあんなひどい事をしなくても宜さそうなものだと言つて愚痴をこぼして居るであらうがどうもこれは仕方がない、屹度生前の榮華の夢虚榮の誇りを後悔して居るであらう。たつた十年二十年の間にやつた報ひが千年と二千年まで経つても消えぬのである。正成は千年経つても忠義を褒められ生きて働いて居る、尊氏は反對に憎まれて居つて誠に氣の毒な譯である。吾々の今の御國の爲に盡すと云ふ者も、千年萬年の後に至つて、或は事實として成るかも知れぬし或は成らぬかも知れぬけれども、此日本と云ふものを吾々の力に依て堅實に維持して行つて、吾々の忠義の思想を以て之を擁護して行つたならば、外國の人が凡そ國といふものは、どうしても日本の如くでなければ行かぬと云ふことに氣が付いて、日本人となるの榮譽を得ることを望むであらうと思ふ。其前に日本の第一の任務として東西文

明の融合を企てなければならぬ、東西文明の融合は日本人の手に依て企てる外はない、西洋人では東西文明の融合が成りたぬのである、東西文明を融合する日本國は最後の師匠になり、外の國が最後の弟子となり日本に歸依して參るのである。西洋人も其の内には日本の如き國體でなければ行ない、萬世一系の帝王を戴く理想的國家でなければいけない、他の國體では其主張の徳が衰へぬ間は宜しいが、風俗が紊れぬ時は宜しいが、人望が何よりの命であるから、上から下に媚びてちやほやせなければならぬお金をやらなければほめられない人望を得る譯には行ないと云ふことになつて、やがて國民が腐敗し切つて、其國が倒れて大革命が起る、革命に亞ぐに革命を以てすると云ふことになつて來る、それでは相成らぬと云ふことを考へるに相違ない。一度憲法を立て、誠に良い國となつたと考へて居つても一夜つくりのものでは、段々考へて見ると是は矢張り自分等の利益上よりやつたものであるから利益に反すれば壞さなければ

ばならない、力が強かつたからあゝして王様になつたのであるが、あれは元來自分の祖先の部下であつたのだと云ふやうな考を始終持つて居るやうなことでは行けないのである。して見れば天來の主宰者を持つ國が東の方に在ると云ふことに氣が付く、其國は何處か、今吾々の師匠として居る所の東西文明の融合を企てて大成した所の日本である、どうしても日本でなければならぬと云つて拜むやうになつて來る。其時に至つては西洋人もオイケンの説はどうだ、アリストーリーの論はこうだなんと云ふことは言はない、日本の具原益軒が斯う言つたと云つて巴里や伯林あたりで説くやうになる。さうなつて來ると日本がえらくなつて、どうも日本のやうな國でなければ行かぬと云ふ渴仰心が起きて、さうして我日本民族の天職たる統一と云ふことが行はれて來るだらう。吾々は日本國の天皇陛下の御旗本であるから外の考を持つては行けない、尤も御旗本も段々後になつて刀の鞘から釣竿が出で來ると云ふやうなこともあるのです

が、吾々はそんなことのないやうに、如何なる所に參つても立派な考を以て共に相扶け相勵ましつゝ進んだならば、此目的を達することが出来るだらうと思ふのである。

神道と日蓮上人に依り開顯せられたる佛教

(一) 序言

凡そものごとは大體に於て満足といふことはないのである、從て満足に意見を言顯すことも全然不可能である。日蓮上人の語にも一滯を嘗めて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよとあります、私はこの意味に従ひまして所感の一部分を述べ皆様方の御判断により大體の意味を御推察下さる様願ふのであります。

村雲尼公猊下の御歌に

御佛の道を究めよ敷島のやまと心を心とはして

と云ふお歌がある、私がこれより述べようとするのも畢竟此のお歌の意味に過

ぎぬのである。即ち敷島の日本心に融合したる御佛の教を日蓮上人が開顯されたのであると信じて所感を述べてみやうと思ふのである。但し私が今爰で神道と言ふのは、世の所謂鈴振り神道の意味ではない、夫と同様に今茲に日蓮上人の佛教と云ふのも、決して大鼓を叩いて御題目を唱ふるを以て、能事終れりと考へる様なドンドコ法華の意味でもない、斯くては何となく鈴を振たり大鼓を叩くのを非難するが如く聞へるのであるが、決してそうではない、神鈴を振る音が鬱蒼たる森林の静かなる空氣を破つて聞へるなどは、確かに人をして神聖を感じ人をして心中の邪念を一掃せしむるが如く感じ、又拍手の音なども何とも云へぬ神々しさを覺ゆるのである。御題目や大鼓もその通りで、何となく積極的な活動的なさうして亦雄大な男性的の觀念が、油然として一種の信仰心と共に起きるので、之を消極的な鐘聲に比べますと雲泥の差がある。昔からの戦争でも大鼓は攻める時の合圖で積極的であり、鐘は退く時の合圖で消極的である、之等は實に能く自然の感想と調和して更にこれを人心に傳ふるのであるから私は決して鈴や大鼓を用ゆることを非難するのではない。私の今申すのは、形式に囚はれたる神道や日蓮教を謂ふのではない、神ナガラ之道と日蓮上人の開顯されたる崇高なる佛教上の意義とを撮りて、私自身の信ずる所を述べ様とするに過ぎぬのである。

(二) 予の見たる神髓の道

一體この神ながらの道と申すのは、天地自然の運行其まゝの道であつて、其處に何等の議論も理窟もなく平々坦々たる大道であるので、我御國體の淵源は實に此所に存するのである。何も態と事を構へるのではなく、何も天地自然の有様を解剖して小六ヶ敷い理窟を付けたり人爲的に劬勞して秩序を極めたりするのではない、君臣の關係も自然に出來たので、何等の人爲的細工を施したの

ではない。父子の關係も兄弟の關係も亦其通りで其間に何等の理窟もないのである。

私は我國の古典には殆んど門外漢であるが、私の承知致して居る範圍内に於いては、本有自然の姿に一種の靈力、則ち信仰中心となるべき本尊を籠めて居るので極めて能く包容的に而かも極めて能く統一されて居るので、之等は皆一種靈妙なる神力に對する信仰心を中心として何等の理論も何等の紛争をも許さぬ點より湧き出でたる極めて崇高なる而かも純潔なる思想の自然的存在の如く見ゆるのである、特に此の一種の靈妙なる神力に對する觀念は極めて盛んであつて、如何なる事も皆此の神力に依て決定せられ判斷せられる如く見ゆるのである。例を引くも畏れ多いのであるが、我御皇統は一系不變にして永き歴史を有するが故に、崇高なる靈威ありと云ふが如き理窟めいたのではなく、皇統一系は本有の靈氣、則ち過去にも生じたるにあらず、未來にも滅すべきにあらず

る大靈力の自然的存在である、則ち天地自然の大道の顯はれであると言ふのが神ながらの道といふのである。君臣父子の關係は天地自然の決定で人力の作用ではない、其間に存する道は天地自然に與へられたる至情より生ずるので、人為的の理論を挿むべき餘地はないので、是が則ち神ながらの道であるのである。親は三年の間手鹽にかけて自分を育て下されたのであるから、少なくとも三年の喪を要すると云ふ様な交換主義ではない、我を遇するに國土を以てしたので我も亦國土を以て報ゆると云ふ様な現金主義でもない、天地自然本有不可滅の情合から自然と顯はるゝ道を誰れも彼れも行ふて來たので、其間に何等の理窟もなく何等の無理もないのである。言葉を換へて云へば、絶對の意義を有する主裁者を戴き絶對の服従を本源とする思想より、自然と顯はれて來る一種の徳風を以て平和と幸福を得るのが神ながらの道である。更に言葉を換へて云へば、理想的判斷にのみ依らずして人生の至情と純潔なる信念とより直覺的に必

然の結果を感得するので、此の神ながらの道は我國の古代に於て明かに顯はれて居るのである。

私は未だ如斯斷言する資格はないのであるが、全體佛教夫れ自身の思想は、無明とか煩惱とか眞如とか法性とか云ふことがあつて、此の二つの大敵が戰爭を繼續して居るので、儒教に於いても善惡兩性の議論があり、耶蘇教に於ても神と魔との争を見せて居るのであるが、日本の神ながらの道と云ふものには此兩面の分立を認めて居ないので、唯だ單に崇高絶對なる神の威を畏み、鏡の如き靈力の發揮を信じて此の靈力の作用により凡ての穢れを除くので、如何なるものにも決して之を敵視することなく之を賤視することなく、一旦御祓を行ふて凡ての穢れを洗ひ清めたる以上は、如何なる者も悉く皆統一包合せられ、罪障を積み重ねたる醜漢夫れ自身は光彩陸離たる淨身となり最早何等の罪科を認めぬのが神隨かんじゆいの道としてあるのである、而かも此道を支配する觀念は、則是

れ萬代不變の中樞的絶對觀念で、其根元を君臣の間に起し父母に妻子に子孫に及ぼすのである。要するに我神隨の道は、其本源を絶對主義の意義より發しませるので、この精神あればこそ、我國民は天皇の大勅宣を拜するや否や、直に死を以て大命を奉ずるの大精神が立派に發揮さるゝのであるが、この崇高なる思想は決して理論上より打ち立てられたる結果ではなくして、自然の感想より自然に起つたので其間に何等の疑義をも挿まぬのである。この崇高なる神隨の道は、我日本の國民性の本源を成し偉大なる而かも純潔なる國風を生ずるに至つたのであるが、段々と世の進むに従ひ世の中の事が段々と錯雜する様になつたので力ある信仰も理論の力に弱められ段々と墮落することになつたのである

(三) 佛教

歴史上の事を詳かに述べることは略することとして、兎に角儒佛二教の渡來

により我國民の思想界は大なる變化を生じたといふことは明瞭である、單純より複雑に實際より理論に長閑なる様子より波瀾ある状態に移りたるのみならず、我國體の根本義に若干の動搖を認むることになつたのであるが、何に致せず、一見高尚なるが如くに見ゆる理想的趣味を味ひ得たる當時のハイカラ連と、どこまでも保守主義なる頑固連との争闘は必然の結果として顯はれ、自然の結果として儒佛力を協せて古來の精神思想を撲滅せんと致したので、其結果は理想を主とする儒佛は自然の情操を主とする神道に勝ち中世時代の思想を造つたのである。この間の消息は先最初に敏達天皇の御事蹟として日本記の傳ふる所に依れば、佛法を信ぜずして文史を愛すと云ふので此時代では儒の方が勢力があつたのである。夫れから用明天皇の御事蹟には、佛法を信じ神道を尊ぶと云ふ様子に見えるが、是は理想としては佛法を信じつゝ神ながらの道をも尊敬すると云ふので少し不明瞭の如く見ゆるのであるが、この際には佛教は既に思想界

を征服したのであらうと思はれる。今度は孝徳天皇の御代になりまして其時代の事を見ると、佛法を尊び神道を輕んずと云ふことになり佛法が全勝を得たのであるが、何に致せ、我國民の思想は相當年月を経るにあらざれば全然變更する譯には參らないので、初めの間は依然として現實主義で世を濟ひ民を利すると云ふにあるので、哲學めいた研鑽よりも現實的觀念の方面に向て進歩したので、抽象的な信仰に依つて安心を求めるとも、寧ろ佛法と云ふものは現在に幸福を與へて呉れるものである災難を拂ひ除けて呉れるものである、貧乏人も金持になり病氣も癒して呉れる運の悪いものも良くして呉れる、萬事につけ救ふて呉れると云ふ鹽梅で佛様を信じ伽藍を建てさへすれば、以上の功德が積まれ罪障は直に消滅するのみならず自己の悔悟よりも寧ろ拜佛によりて幸福を得らるゝと云ふ様な惡思想をも養成することになつたが、この間に行基菩薩の様な方々が佛教の先覺として顯はれて、救世濟民を物質的に行はれ橋を架け道を

開く等に大功があつたが、此活如來様の時代に國體の淵源たる大切な大意義が
紊亂の端緒を起したので、其近きに至りては、現神たる天子を以て三寶の奴と
稱せしむるに至り、我無上崇儼なる特種の大意義を有する御皇統を妻子珍寶及
王位の王位と同視するの大妄想に陥し入れたので、上流の風儀も僧侶の跋扈と
共に亂れて仕舞ひ、其の内には不都合極まる亂暴な僧侶が多くなり、終には國
體を危ふし奉るべき場合となり、僧と云ふ者は御祈禱をするもので御祈禱が上
手で讀經の聲が清んで居りさへすればそれで宜い、社會の上流に立て威福を肆
にし上下の風儀を紊して差支ないと云ふ様な傾向になつたので、我日本國の思
想界は殆んど極端に墮落し、有史以來未だ曾て見ざるの暗黒世界を形成して仕
舞つた、僧侶の害毒は稱徳天皇時代に於て其極に達したので、是れより後佛教
は稍や衰頹の色を顯はし一時不首尾の體となつたのであるが、傳教弘法の如き
名僧が出るに至つて、護國濟民を標幟として新たなる宗派を弘むることになつ

たので、再び大繁盛の有様となつたのである、殊に此際傳教大師によりて弘通
せられたる法華經の如きは、殆んど上下を通じて尊崇せられたのであるが、如
何せん時機未だ熟せず爲に御國體の眞意義とスツカリ融合致さなかつたのであ
る。此時代に於ける佛法の勢力の偉大なるは實に驚くべき者で、眞言宗の如き
殊更不都合なる結果を作したのである、則ち宮中に偉大なる勢力を及ぼし清和
天皇の如きは酒醋監を御斷になり、魚類なども絶て御用ひになりませず殆んど
斷食の如きことを遊ばされ、三日に一回の粥を召さるゝと云ふことにお成遊ば
したので、竟に御衰弱の餘り御崩去になつたとさへ傳へらるゝ有様となつたの
である。斯の如く随分如何はしい事が段々と増加して參つたのであるが、要す
るに唯だ唯だ消災除厄を目的とし現世に幸福(寧ろ清淨ならざる幸福)を得んと
のみ勉めたので、人情は日に月に墮落致し國風は無下に賤くなり、眼前の快樂
と現在の執着に魅せられ、轉迷開悟などの意味合は夢にも見る能はざることと

あつたのである。

(四) 法然上人布道の功罪

其内法然上人の如き大徳が出られて、現在執着の念を拂ふて呉れたので、佛に對する思想も此に一變して今度は極端より極端に走り、現世を厭ひ西方淨土に往生せんとする抽象的の一方に傾いて仕舞ひ、この大切なる日本國を穢土と唱へ、一日も早くこの穢土を離るゝのを無上の幸福の如く考へることになつたのである。この際に於ける法然上人の大功は充分に後世に傳ふるの價値ありと私は信ずるので、つまり現世執着利福貪着の熱病に罹り不都合の限りを盡さんとする國民を救ふべき解熱藥として淨土門を開かれたのであらうと考へるが、如何せん、法然上人は我國體を充分に了解なく神ナガラの道の存在を軽く見られたかの如き鹽梅で、天照皇大神の神勅と祝辭、則ち我帝國は絶對にして無始無

終の意義を體現する帝者を戴き終には精神的に世界を統一すべき資格を有する國柄である、神ナガラの教は我日本國の中心として世界に弘通せらるべきものである、從て我國土は決して穢土ではない、我國家の爲に身命を擲て御奉公するのは、我國土を壯嚴して常寂光土たらしむる所以である、今は成程穢土の如き體裁であるが、假令へば雲に覆はれたる日月の如く我國性の崇高なるは依然として變ずることはないと言ふ點、此點は大蒙古小蒙古の言ひ顯はしに依つて日蓮上人が明瞭に仰せられてあるが、この大切な意義には着意せられて居らぬので、つまりア、云ふ教義を流通せしめて國民全般を悲觀的な消極的フセ鐘を叩いてメリコマなければならぬことにして仕舞はれたのであると私は考ふるのである。併し元來佛教と云ふものは如何のものであらうか、果して神道と矛盾するものであらうか、矛盾すればこそ佛法を尊び神道を輕んずることになるのであるが、それは果して佛教として正しい事であらうか、それも雙方に於て

何かの誤解か或は解釋違の爲に反對になるのであらうか、之等の事に關しては大分慎重なる研究を要するのであるが、要するに神道は神道の本義を忘れ、佛教は佛教の眞意義を傳へずして、雙方とも皮想的の觀念に依つて相反剋したので其過は雙方にあるのであると信じる。

(五) 結論

何に致せ、私の信する所に依れば、法華經は我國體の解釋とも稱すべきもので、殊に壽量品に於て其意義が明瞭に考へられるので、神ナガラノ道は則ち法華經に依つて説明せられ得ると私は信じるのである。即ち法華經の意義は理想上より見るのと事實上より見るとの二つにならうと思ふのであるが、理事の二方面より法華經を解釋せなければ複雑なる頭腦に深刻なる信仰を與ふる譯には參らぬ、如何なる藥でも用ひ様に依つて毒にも藥にもなる様な譯で、我國民も

太古時代に於ては現實方面のみで満足なる安心を與へ得るのであつたが、哲學的思想を賦課せられたる而かも國體と相容れざる邪路に向て進みつゝある時代にあつては、理想上より之を説明するにあらざれば到底満足なる結果を得ることが出來ぬ。然し如何に傳教大師の如き高僧がお出になり、理の一念三千とか一心三觀とか云ふて見られた處が、其の説たるや理觀を脱せざる以上は、理想を超絶したる神ナガラノ道と融合し充分に我國民性を發揮して神ナガラノ道を圓滿に行ふ譯には參らぬので、法華經を以て我御國體の説明なりと信する迄に我國民の觀念を進むる譯にはどうしても參らぬ、佛魔兩立を允さざる法華經の本義が如何に包含的であるかを感得すると同時に、我國體は即法華經の本體である。我國體の有する使命は則法華經の使命である、我國體の研究は即これ法華經の研究であると云ふ様な雄大なる思想がありさへすれば、神道と佛教とは正しく相一致するのであるが、之を教へる人がなければ何うしても神佛の融合

統一を見ることが出来ぬ。然るに我天祖及釋尊の垂教は日蓮上人に依つて解釋せられ、日蓮上人の開顯せられたる佛教の眞意義は正しく神ナガラの道と相合し、事觀第一の神ナガラは日蓮上人に依つて開顯せられたる法華經に因り理事ともに圓滿に具足せられつゝ、我日本國に顯はれ、我帝國の使命が彌々益々雄大にして好望なるを證するのである。是等の意義は日蓮上人の遺文を研究すれば明瞭に認めらるゝのであると私は信じて居る、上人の右の意義を詳細述べば罄せないが此には上人の御遺文中、右の意義に關し適切なる判斷の一助ともなるであらうと思ふものを、拔萃すれば、

『我日本國は一閻浮提の内月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも超へたる國ぞかし』(神國王抄)

『佛法必ず東土の日本より出づべきなり』(顯佛未來記)

『日本一州閻機純一なり』(守護國家論)

『いたう天の此國ををしませ給ふゆへに大なる御いさめあるか』(四條金吾御書)

『一閻浮提第一の本尊此の國に立つべし、月支震且未だ此本尊ましまさず』

(觀心本尊抄)

『日本一州は印度震且にも似ず一向純圓の機なり(中略)純圓の國を權教の國となし、醍醐を嘗むる者に蘇味を與ふるの失、誠に甚多なり』(念佛無間抄)

『本地久成の圓佛此世界に在せり、此土を捨て、何れの土を願ふべき』(守護國家論)

若し日蓮上人の是等の遺文を拜讀すれば、上人の心は正しく神ナガラの大道と融合し、理事兩方面より解釋せられたる御國體は正しく法華經と一致し、我日本國は實に法華經を色讀しつゝあるを感歎せられ茲に前代未聞の大法門を開かれたのであると私は信じて居るのである。要するに「神ナガラ」の道と「日蓮上人」によりて開顯せられたる佛教とは正に同意義である、この道にあらざれば我

國民の天職を盡しつゝ御國體を擁護し併せて一同の安寧幸福を得ることが出来ない、何うして來様と思ふのである。

自強將命と統一

(一) 戊申詔勅を拜す

私の今日の演題は自強將命と統一と云ふのである。自強將命の四字は誠に烏滸がましき次第であるが、少しく信ずる所かありまして選びました新しき言葉である。自強と申したならば諸君は必ず戊申詔勅を御聯想になるであらうと思ふ。同御詔勅に

上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ維レ信維レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去
リ實ニ就キ荒怠相誠メ、自彊息マザルベシ。

と仰せられてあるのである。私が今爰に自強と申するのは、斯の如き意味にてはなきも、此御詔勅を拜するに就けても、私共が兼々願ひ居れる自強の意義は

此御詔勅を外にして到底達し得られぬのである。此御詔勅の御趣意を、天行健君子以自彊不息とある易の言葉に就て考へて見るに、元來この易の言葉は、日月の運行すること晝夜息まざるが如く、自から勵みて怠らず、勇猛精進して退轉せざる様子を言ふのであると云ふことであるので、この難有き御詔勅を下し給ふたのである。我々臣民は又此の如き心懸を以て聖天子の御叡慮に御答へ申上げなければならぬのであるが、我等臣民の心懸は果して此の如きであるであらうか。華を去り實に就くの意義は果して能く行はれて居るであらうか。荒怠相誠むる御趣旨も果して能く遵奉せられつゝあるであらうか。この點に就て考へて見たならば、誠に以て恐懼措かざる次第である。

(二) 自強將命の意義と日蓮上人の感言

何に致せ、私が今茲に自強と申するのは、何人にも指をさへせない様に、徳

を積み力を養ふと云ふのである。言葉を変へて言ふて見れば、自分自から奮發して強くなるのである。御詔勅の自強の御趣意は勉強の強の字で、私の申する自強は強弱の強であるから、何となく意味合が違ふ様ではあれども、よくよく煎じ詰めて見れば少しも違つたことはないので、御詔勅の自強がなければ決して自強の意味を全うする譯には參らぬのである。夫れからまた將命と申するのは、天命を將ふと云ふ意味で、徳を積み力を養ひ天命の自から來るを俟ち然る後天命を將ひ奉らんとするの意味合であるので、書經の胤征に『予今爾有衆ヲ以テ天罰を奉將ス』とあるのが其語源である。斯様に字義の講釋を致すのは畢竟するに何の益もないやうであるが、日蓮上人が我日本國には一種の靈異なる天職あるを感得せられ、『一閻浮提第一の本尊此國に立つべし』と觀心本尊抄に仰せあり、又進んで顯佛未來記に『佛法必ず東土の日本より出づべきなり』と申されたのは則ちこの事であらうと信するのである。『日本一州は印度震旦にも

似す一向純圓の機なり』と念佛無間抄に申されたるのは自強の意味で、其順序より申すれば、先きに能化の徳を養ひ一閻浮提第一の本尊を立てたならば、佛法は自然々と我日本より出るであらう。斯して此世を統一して如來の本願を實顯するであらうと申されたのであるので、自強將命の意義は、實に大上人の仰せられたるお言葉により明白に説明し得らるゝので、其結果は申すまでもなく統一の二字に歸するのである。

(三) 畫一と統一との差異

元來統一の意味には融合とか調和とかといふ事が加つて居るべきであるが、世の中では動々もすると無理遣に併合するのを統一と考へる人がある。併し之れでは本當の統一といふものではない。仇敵同士が雨露を凌ぐ爲に一つ家根の下に立つたといふ風では統一とはいへない。譬へば麥藁製の住吉踊の人形の様

に色々の人形が一の傘の下に集つて嬉々として樂む様な氣持のものでなければならぬのである。私はあの住吉踊の玩弄物を見る毎に一つの教訓に接する如く感するのであるが、何に致せ色々の思想色々の學説が悉く一堂に集つた様な心持に融合するのは何よりも美しいことであるので、斯の如き寛宏な心持でなければ到底統一の意義を全うすることが出来ぬと思ふのである。少し餘談に涉るやうであるが、曾て三教會同のことに就きて或る歌人が、

『神の道ふみなたかへそ外國の教に迷ふあはれはらから』

と云ふた方があるが斯う云ふ様な心持では統一の出来様筈はない。畏き御製に『四方の海皆はらからとむつむ世になど波風の立ちさわぐらん』

と仰せられた如き心持でなければ統一の主義を全うする譯には參らぬと私は信するのである。萩は萩桔梗は桔梗と云ふ風に百草千草咲き亂れて居る中も自然自然と統一が行はれて居ると云ふ風でなければならぬので、お互に相反撥する

様なことでは到底統一を叫ぶ資格がなからうと思ふ。又他の一方では何も彼も皆同一の形式を備へ又させようと云ふ偏狭な心懸では到底統一の出来よう筈がない、極めて出来のよい處で先づ劃一と云ふ位のものである。どうも此統一と劃一とは一見した處では大分似て居るが、實際は途方もない差で統一は包容の結果であるのである。

(四) 雜然たる思想界と我國特有の風味

我國の現今の思想界言論界の有様は如何であるであらうか。我國民の美質は次第々々に失はれつゝあるが如く見ゆることがないであらうか、尠くとも雜然として歸趣する處を知らざるが如き有様ではあるまいか。獨り歸趣する處を知らざるのみならず幾多の思想や危険なる挑發的言論が盛に行はれ時々刻々に我國民を墮落せしめつゝあるが如く見ゆるのである。如何に百千萬の思想家が自

分勝手に其所信を述べて見た處が畢竟一種の戲論に過ぎぬとすれば、桔梗は桔梗菊は菊といふて樂天的にこれを見のがすことが出来るであらうか。如何に有害無益なりと信じながらも寛宏なる觀察を以て看過するのが宜しいであらうか。是れは確に研究すべき問題である。さりながら、如何なる毒藥も用ゐる方によりては無上の妙藥となるが如く千種萬別殆んど歸着する處なき思想界も指導の方法により統一されたならば、譬へば春の野に色々の花が咲き亂れて云ふべからざる趣きの滿つるが如く、反て無理遣に一種の典型に壓しつけて活氣を沮喪した鉢植の花よりも、遙かに雄大にして且艶麗なるに相違なからうと思ふので、どうしても是等の雜然たる思想に一つの根本的統一を與へて各々其天性の美を盡しつゝ大なる美觀を作らなければなるまいと思ふのである。私は庭園の造り方などには一向趣味を持つて居らぬが、如何に素人の觀察でも日本と西洋の庭園とは其味が違ふのである。西洋の庭園は園中を歩みつゝ賞美する如く日

本の庭園は座敷より眺むる如く出来て居るので、是等の點は固より同一には参らぬが、何に致せ西洋の庭は如何にも幾何學的に見えるので一見整然として居るが、日本の庭は決してさうではない。何となく不規則な所に一つの犯すべからざる規則があつて、何ともいへない風致を備へて居るのである。この我國特有の風味ある作風の庭園に於ても統一の意味は察する事が出来るのである。

(五) 國家と宗教と日蓮主義

然らば我國の思想界を統一するに適當なる方針は何か。是れは疑ひもなく日蓮主義である。今多くの學者宗教家及び思想家は國家と宗教との關係に不得要領な判断を下し、元來宗教は神佛に對する人類の信仰を本とするもので、國家と關係あるものではなく、國家觀念を超越して居るものである。従つて宗教を以て國民的道德を養成するには不適當であると斷言する人もあるのである。特

に宗教信仰は愚民を導くの方便で識者とは没交渉であるともまで放言する人もあるが、之れは正しく一種の偏見である。我日蓮主義は立正安國法國冥合を第一義と致すので、決して超國家の意味を含んで居らぬのである。正しき教を立つるのも國を安ずる爲である。法と國と冥合して其間に何等の差別を認めぬのが日蓮主義といふものであると私は信するのである。人によつては、若し果して國家を超越せざるものとすれば、是は決して誠の宗教といふものでない。少くとも高等なる宗教と稱することが出来ぬといふ人もあるが、此れなどは確かに國家の意義を知らざるの過であらうと信ずる。畢竟斯の如き意見は、國家といふものは國民が勝手に約束して出来たものである勢力ある人の威壓作用の結果であると速断し、その他には國家といふものがないと輕信したる結果で、少くとも我日本國の特異なる意義を悟り得ざるの過である。日蓮上人は所化の日本を認めずして能化の日本を認めて居らるので、前に申上げた通り、日本一

州は一向純圓の機とか、閻浮第一の戒壇とか、乃至は又佛法必ず日本より生ぜんとか唱へられて居るので、此邊の消息は小日本と大日本との關係によつても明白に悟り得らるるのである。

(六) 日蓮上人の眼に映じたる大日本國

日蓮上人が我國を小なる日本と唱へらるゝ場合は物質的判斷によつて居るので、讒かの小島のなど、明かに申されて居られるけれども、他の一方に於ては、我日本の存在の意味天職の見地等より御覽になる場合には大日本と稱せられ、十何倍の大きさある支那を指して小蒙古だと稱して居らるゝのである。此邊の意味合より考へて見ても、日蓮上人の心中に映じたる日本國の意義は決して山嶽河海を以て區別せらるゝものではなく、立派に統一の意義ある國家として尊重せられて居らるゝのであるから、他の國家と同様に心得、超國家の意味を以つ

て見る様には參らぬのである、特に日蓮上人は先づ國家を祈りて後佛法を立つべし、彼國によりし法なればとて此國によかるべしと思ふべからずと申されて國家それ自身の資格によりて傳ふべき法をも異にすべきを明言せられて居らるゝのである。則ち此の點に於ては、他の宗教の或は箇人的或は世界的なるとは大に其趣きを異にし王城鎮護とか興禪護國とか二三の好辭令を以て國家を利用し自己の教義を弘めんとするのは、大に其選を異にするので、國家觀念の養成上には最も適當なる教義である。

(七) 科學萬能の迷信に中毒せる一派の學者

それから又前にも申したる或一派の思想家は識者と宗教とは沒交渉で、宗教は畢竟迷信の固まりである。理性に背き情性に走るの實は到底免るゝことが出來ぬ、今日の如く科學的進歩の大なるに關せず、既成宗教の陳腐なる信條を以て

迷信的に人を導かんとするは宜しくないといふ人があるが、日蓮主義は此點に於ても他の宗教と全然其選を異にするのである。全體此頃の學者及び思想家の多くは少し過言かも知れぬが、科學萬能の迷信に中毒されつゝあるのであるまいか。御自分達は道理のよく分らぬことを土臺として學問を組み立て、居りながら、他の人が信じて居て自分達が明瞭に分らぬ場合にはそれを賤んで迷信といふのは沙汰の限りである。等一の數より等一數を減けば、其の残りは等一であるといふ如きより以上の説明をなすこと能はざる澤山の公理を土臺として幾何學を打ち立てながら、道理が分らん説明が出来ぬといふ場合には是を信ずるのは矢張迷信である。世の中に神佛の實在するや否やを辨へずして、これを信ずるは迷信であるといふのは畢竟するに自家撞着といはなければならぬ。特に思想上道徳上のことは數學の如き理論的説明とすべきものではない。君に忠に親に孝に朋友に信なるが如きは何故にそうでなければならぬと詮索する必要がな

い。假令必要があつても十分に了解せぬ内に之を行ふを迷信なりとせば、仁義五常の道は悉く迷信となつて仕舞ふのである。我日蓮上人は此點に於ても理事圓滿具足の意義を充分に發揮せられて居られるので、理論と實際とをよく融合調和して少しも無理な處がなく、徒に高遠に走り、空想に耽るを許さぬと云ふ御教訓である。

『所詮妙法蓮華經の當體とは法華經を信する日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身これなり』

『御宮仕へを法華經と思召せ一切世間の治生産業は皆實相と相違せずとは是れなり』

『天晴れぬれば地明なり、法華を知るものは世法を得べきか』

と仰せられたるが如きは愈々以て明瞭である。此點に於ても他の空想に走り、或は理義の研究にのみ腐心して、世法に遠ざかる或る宗教に比しては其味の淺

深固より同一の論ではないのである。

(八) 宗教と道德の調和

又一派の思想家は宗教と道德とは没交渉である。動もすれば反て道德に反することを教へるものであるといふて宗教全體を非認する偏狭なる思想家もあるのである。かういふ人は多分純他力教の教義を以て宗教の本色と考ふる人々であらうと私は信ずるのである。如何にも他力教の

『善人尙以て往生を遂ぐ況んや惡人をや』

『父母の孝養の爲とて念佛一邊にても申したること未だ候はず』

といふて教へる宗教の如きは一見したる處にても如何にも道德上有害であるかも知れぬのであるが、同一の他力教でも

『罪人尙生る況んや善人をや』

といふのもあるから一概に道德と没交渉なりと謂ふ譯には參らぬ。別して我日蓮上人の教訓としては

『外典三千餘卷所詮に二つあり所謂孝と忠となり：何に況んや佛法を學せん人知恩報恩なかるべしや佛弟子は必ず四恩を知つて知恩報恩を致すべし』と申され、開目鈔には劈頭第一に

『夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり所謂主師親これなり又習學すべき物三あり所謂儒外内これなり』

思想家が宗教と道德とは元來没交渉の如くにいふのは誠に以て其意を得ざる次第である。或一派の人は宗教心と道德に關して

『信仰心なくとも道德は堅實に行はるゝものである』

と放言する學者すらあるに至つて居る。私は如斯淺薄なる議論を駁するの必要を認めぬのであるが、一寸一言云ふて見ると成る程毎日々々平氣に行ふ位のこ

とは、信仰心なくとも出来るであらうが、凡そ何事によらず、正邪の觀念中に戦つて決せざる場合にはたゞ普通一般の教では到底間に合ふものではなからうと思ふ。ただ、道理でかためたのみの訓誡では間に合はぬ。どうしても神秘的な觀念がなくてはいけないのである。生死の界に處して忠孝を全ふし節美を行せんとする場合の如きは、どうしても一種の信仰心を要するは勿論である。少くとも自己の運命を支配し自己の善惡を鑒査する自己以上のものに對する觀念と、そして困難の極點に達つて迷はぬといふことは到底出来るものでなからうと思ふ。此點から考へて見ると平々凡々たる有様に於て人道を踏み行ふことに就いては、信仰心を要せぬのであるが、是こそ一身の大事といふ時になつては自分の不完全にして堅固ならざる意識のみにては到底過なきを期することは出来得ぬのである。御製

『目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり』

また

『我心及ばぬ國のはてまでも夜晝神やまもりますらん』
を拜しても此間の消息を窺ふに足ると思ふ。

(九) 日蓮主義は厭世的にあらず

又一派の學者間には、佛教といふものは悲觀的なものである厭世的なものである。従つて凡ての方面に向ひ活氣ある發展を要する國には不適當であるといふ説がある。是なども至つて偏狹な議論であると私は信ずる。釋迦如來が家を捨てたから、厭世的といふかも知れぬが、我々軍人が國家の爲に家を捨て、戦ふのも宗教家が家人の係累を辭して衆生を濟度するのも、同じ事であるので、専念事に従ふ場合に於ては、どうしても身を捨て家を捨て妻子を捨てなければならぬので、決して厭世的でも何でもない。此點より外如何なるが、厭世的であら

うか。夫れは或一派の宗旨では、如何にも其嫌があるが、これは一時の時世を救ふ爲に必要なので、これを以て宗教の全體を判断する譯には参りませぬ。成る程速かに此世を捨て、極樂往生をなさんとする他力専念主義の宗旨は、如何にも悲觀であらうが、我日蓮主義は決してさうではない。法華經の如きは、決して悲觀的なものではない。人によりては佛教は亡國の教であるなど、放言するものがあるが、是は事實を知らぬ議論で、佛教の盛んな時代は、其國勢の隆盛なりし時代で、佛教の衰頹の後、其國が衰へたのである。何に致せ日蓮主義の厭世的悲觀的にあらざるは、今更論ずるを俟たぬのであるが、

『今日方等經典を受持し上る乃至命を失ふ迄にせん設ひ地獄に墮ちて無量の苦を受くるも終に諸佛の正法を毀謗せず』

『如何に強敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なかれ』

『されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都た

るべし』

『これこそ宇治川渡せし處よこれこそ勢多を渡せし處よ』

又學者の一派の人が、他力觀の惡弊を唱へる人もあるが、夫れは純他力一方より見れば惡弊もあらう。人が海に落ちても泳がずに南無阿彌陀佛と云ふ様なことでは困るが、我日蓮主義は決してさうではない。

『妙樂大師曰く必ず心の堅きによりて神の護即ち強し等云々人の心堅ければ神の守り強しとこそ候へ』

『行學の二道を勵み候べし行學絶へなば佛法はあるべからず』
と上人は申されて居られるのである。

(一〇) 結論

如斯色々な點から觀察致しますれば、世の人の宗教を非難する處、又宗教に

望む處、如何にも尤もな點もあるが、しかし之等は一として日蓮主義を以て解
決せられざるものはないのである。斯く日蓮主義の外の宗義を非難する點は、
悉く皆現今の學者の宗教を非難する點に一致するので、世の學者が宗教を非難
するのは、日蓮主義を知らざるの致す處であらうと私は信するのである。され
ば若し日蓮主義にして四方に弘通する事になつたならば、日蓮上人の申させら
れたる如く。

『日本國一時に信する事あるべし其時は我ももとより信じたり信じたりと申す
人こそ多くあわさんすらめと覺え候』

といふ事になるであらうと思ふ。何に致せ、

(イ) 日蓮上人の國家觀は現今の學者思想家の國家觀よりもより以上である。

(ロ) 日蓮上人の道德觀は現今の學者思想家の道德觀よりもより以上である。

(ハ) 日蓮上人の他力觀は自力を盡して勇猛精進する時に來るべき他力觀であ
る。

假令ば壁に向つてゴム球を投するが如く、自力の多少に依つて他力の作
用を生ずるのである。

(ニ) 日蓮上人の教義の根本義は信仰であるが、その最も重んずる處は主師親
と儒外内とである。

(ホ) 日蓮上人の主義は積極的で活動的である。開顯的である。發展的である。
苦を苦と悟り樂を樂と開くの主義である。

是等の點より考へて見れば最も健全なる思想を養ふには日蓮主義によるの外な
く此渾沌たる思想界を率ゐて、天命を將ひ統一の主義を全うするは日蓮主義に
よるの外はないのであるといふことは何等疑ひもないこと、私は信するのであ
る。是と同時に私は日蓮主義を以て正しく神ながらの道に合するを信すると同
時に法華經は我御國の説明にして、我皇國は法華經の眞意義を實顯する靈國で

あることを信するのである。

歐洲戰亂に關する所感

(一) 緒言

歐洲戰亂に關しては各方面からいろいろの意見が出て居るやうであるが、日本は從來獨逸に負う所が多かつた爲か敵國ながら獨逸の總ての點に就て何となく感嘆の眼を以て觀るものが多いやうである。又他の一方には、英國が日本の同盟國でもあり且つ日本と親善の關係にあるために、英國の方に肩をもつて議論する人もあるやうであつて、日本人全體の議論としてはどちらともつかず各自勝手の議論を試みてゐるやうに思ふ。自分は戰亂勃發の當時からして一種の考を持つてきた。自分の關係上から多少英國の方に最負する氣味があるかも知れないが、大して偏頗のある考ではないと思ふので、それを一寸述べて見やう

と思ふのである。

(二) 地位の競争の上より見たる獨逸と英國

ヨーロッパの北邊の一小國たる獨逸は、かの七十年戦争に成功してヨーロッパの大國となつたが、其後現皇帝ウイルヘルム二世は不世出の英資を以て帝位に即きヨーロッパの獨逸をして世界的の獨逸たらしめやうとの考を起し、銳意國力の振張を計りすべての方面に大なる發展を試みたのである。就中最も目覺しいのは、英國と海上に於て競争をなし得る程度に獨逸の地位を高めんとするの努力であつた。今度の戦争の如きも、人に依つていろいろ考はあらうが、大體から云ふと獨逸が世界的大發展をしようとする野心から起つたものであるから英國は自然自衛のために起たざるを得なくなつたので、言ひ換へれば英國は自己の世界的地位を護らんが爲め、獨逸は之を崩さんがために此の戦争を惹

起したものと考へて差支がない。

(三) 戦争と準備と獨逸

元來獨逸人は準備に巧みな國民で、總てのものを根本から遺漏なく研究して確實なる基礎の上に總てのことを立てるといふ國民である。今次の大戦に際してもこれがよく現はれてゐて實に感歎の至りである。かう云へば獨逸は準備に準備を重ねて何等遺漏なき程度に達して初めて今度の大战を始めたやうであるけれども、實を云へば獨逸は時期を早まつたのである。成程準備に巧みではあるが、小なる準備に堪能なのであつて大なる準備に關しては聊か粗漏なところがあつたのであろうと思ふ。必ずしも獨逸人は常に小的計畫及準備に敏にして大的計畫及準備に敏ならずとは言へないけれども今度の戦争に就てはかゝるとが充分言へやうと思ふ。何故ならば、若し獨逸が今度の戦争を後に世界的大發

展をするための準備に止めるといふ考で起したのならば、戦前に殊更露骨に英國の世界的地位を危ぶましめるやうな海軍の大擴張などはしないで、一意大陸に成功することを努め少くとも英國を敵に廻さないやうな工夫をしたであらうし、若し又今度の戦争で一舉にして英國を摧破しやうと考へたのならば、今少し海上の勢力の上に於て懸隔がないやうな準備を整へて而る後に戦を起すやうに導くべき筈である、此點に於て獨逸には準備上の大缺陷があると云なくてはならないと思ふ。

(四) 英國の襲用的戰策

前にも述べた如く、獨逸は、飽く迄英國に對して根本的打撃を與へるといふ意志があつて、英國も此點に就ては早くから注意して居たのである。世人のあつる者は英國が戦争を開始するや否や殆んどヨーロッパの戦争に關係がない世界

各地の獨逸の領地に手を出したのを見て英國の慾張りは底が知れないと云つて惡口を云ふ人もあるが、自分はさうは思はない。蓋し英國が此際第一に必要なとするところは獨逸の世界的地位を根本的に破壊することであるから、獨逸が戦争に於いて如何ほどの成功を收め得やうとも英國としては獨逸の世界的地位を破壊さへすれば自己の地位は安全なのである。さればこそ英國は世界各地の獨逸の領地に手を出して獨逸の世界的地位を壊さうと努めたのである。かういふ風に獨逸は英國に根本的打撃を與へやうとし英國は獨逸の世界的地位を壊さうと試みてをるのであるから、獨逸が今度の戦争に如何なる成功をヨーロッパに於て收め得ても大體に於てはその目的を果し得たものではないと觀察するより外はないのである。開戦の當時、自分はある雑誌記者にかういふことを話したことがある。『英國は今度の戦争に對しては祖先傳來の一定した戰策を採つてを、即ち自己の世界的地位を侵害するやうな大陸の強國が現はれると、大陸の

他の諸強國を勸誘又は使喚して新らしく起つた強國の背後を衝かしめそれと相應してその國を打滅しやうとする、そして自己の大陸に力を注ぐ程度は、之が爲めに自己の世界的地位を危くしないといふ程度に止める。之が、英國の從來襲用し來つた戰策であつて今度の大戦にも獨逸の勃興に對してヨーロッパ諸國が弓を引いた絶好の機會を利用して此自己の戰策を行はんとするために戰に參加したとも云へるのである。若し戰爭が第二の舞臺に移り入るならば、ナポレオンに對する英國のやうな關係となるであらう。然し今日の英國は例へばフレデリキ大帝を助けてフランスのルイ十五世に當らしめたやうな状態にあつて、此點を歴史上から見ると無限の興味を覺ゆるであらう。今度の戰爭に對する英國の戰策は之が絶好であつて、その結果も自然之に依つて知ることが出来るであらう」と此考は今も尙依然として變らない。つまり獨逸の世界的地位を破壊して、獨逸を孤立さして自己の世界的事業の完成に何等の妨害をも加へさせないとい

ふのが英國の大目的であるのである。要するに英國としては自己の勢力を除き多く大陸に用ひるのは、古來の訓戒に背くこととなるのである。此點から考へて來ると、獨逸は戰爭に於ては成功してゐるが此大眼目に於ては大失敗をしてゐると云はなければならぬ。

(五) 攻守の關係より眺めたる獨逸及び聯合國

今一つ考へて興味のあることは、獨逸の戦前の準備は實に驚くべきものがあるが、つたにも關らず、當初の大目的は大陸に於てすら果すことが出来なかつたのは何故であらうか少し忌憚に觸れるかも知れないが、今度の戰爭は驚くべき準備のある獨逸と驚くべき不準備の聯合國との戰爭であるから、數理的に云へば、今頃は獨逸の大成功の裡に最早戰爭の終局してをるべき筈であり又自分も或はさういふことになりはせぬかと思ふて心配して居たのであるが、今は之に反し

て、四つに組んで動きが取れないやうな有様である。これは一體何故であらうか之に對して自分は餘りに獨斷であるかも知れないがかう考へる。即ち、獨逸の國民は元來腰が強くつて靱強で、何事に對しても用心深くはあるが、自己を忘れて敵に突撃するといふ方面の素質を充分に具備してはをらない。つまり守勢に秀でた國民である。この點は佛蘭西人と正反對である。然し戰略上の見地から云ふと。攻撃精神が旺盛なることは最も必要であるから獨逸も此點に着目して、この見地から熱心に教育し熱心に凡ての準備を整へた。次に佛蘭西の國民性はどうかといふに、一般に輕捷であつて守勢をとるのには適してゐない。然し周圍の事情上止むを得ず、獨逸と反對に防禦に全力を盡して來た。之を概觀するに、共に各教練を以て其缺點を補ひつゝ相對してをると考へられる此點から見ると、獨逸人に旺盛なる攻撃精神を附け加へても、佛蘭西人に之を與へたのに比べて到底不十分なるを免れぬではあるまいか。けれども作戰上

の實績に就て考へるに、獨逸は常に攻撃的であるし聯合軍は常に守備的である。之を國民性夫自身から見ると、若し獨逸人に攻撃に對する天稟の素質があるならば、今一層著るしい成功を収めることが出来るであらうと思ふ。此點は觀察上餘程面白い點である。だから、獨逸がもし攻勢作戰を採り得ないやうな有様となつたならば應て獨逸の失敗に終るであらうと考へるのは間違ひであつて、そこに至ると獨逸の腰強い國民性が大なる力を現はして來て決して大なる失敗はしないであらうと思ふ。

(六) 注意すべき英國の意氣

かういふやうな點から考へて戰は如何に結着するであらうか。若し英國民が百年以前のやうな堅實な思想と勇氣とを持つてゐたならば此戰爭には獨逸の大失敗を見なければ止まぬであらう。假令他の聯合軍が戰を止めて全ヨーロッパ

を敵とせなければならぬやうになつても、英國は自己の世界的地位を失はないために何處までも戦争を繼續するであらう。けれども今の英國人に果してこれだけの決心があるであらうか。もし事實英國人の思想が百年以前に比べて劣つてをるならば、ヨーロッパ諸國が戦に飽きて戦争を止めやうとするときには英國も恐らく之に誘はれて平和の克復を求めらう、さうなると戦前よりも若干の膨脹を見たところの獨逸は、必ず近き將來に於て十分の戦備を整へて再び第二の戦争を導くであらう。さうすると英國は餘程危い状態に陥るに違ひない。それであるから識者は夙に此點に着目しなるべく聯合國側をして獨逸と媾和するとなからしめるやうにするのが必要であると信じ、此點に就て聊か疑を起さざるを得ないやうな状態になりつゝあるのを見て更に親交ある他國をも引き入れて單獨媾和の不可能性を確かにしやうとする政策を探りつゝあるやうに思はれる。けれども英人は果して之だけの意氣込を以て識者の望むやうに實行

するであらうか。これは、英國のためには最も注意すべき點であり、同盟國民たる吾々は心に心配しつゝ興味を以て觀察すべき點であらうと思ふ。

(七) 歴史を繰返しつゝある戦争及獨逸の準備

要するに、今度の戦争は、ルイ十四世の時代に英國が一方にはオーストリアを使い、他方にはデューク、オブ、マールボローをニールランドに出してフランスを壓迫し、フランスをして英國の基礎を危くするやうな海上的軍事準備を完うする由なからしめてより以來ルイ十五世を通じてナポレオンに至る迄の間の歴史を繰返しつゝあるものと觀察したならば、大して間違がないであらうと思ふ。前にも一言した如く、獨逸は戦前に實に驚くべき程行き届いた準備を整へて居たのであるが(一例を挙げれば、自動車を作るにも、それが戦時になれば直ちに使用し得られるやうにし、又子供の玩具などを作る工場でも、戦時

にはすぐに軍用品製造場に變ずることの出来るやうに初めからちやんと系統的に整頓してあつたなど洵に想像以上に細心の用意が整へられてあつた。それにも係はらず、前に述べたやうな大眼目に對しては洵に粗漏であつた。要するに獨逸は小なる準備には至れり盡せりで感心の外はないが、大なる準備に對しては、それを十分に整へる時期を待たなかつたことを惜む次第である。

(八) 戦争の我國に及ぼす利害

最後に述べてをきたいことは、戦争が長く繼續するのは日本にとつては洵に望ましからざることであるといふことである。日本人の中には今度の大戰はわが國にとつて却つて國力伸張の好機であるとし内心喜んでゐるものもあるといふことである。或は輸出輸入等の關係から見ても今度の大戰は日本の財政を豊かにするからと云つて此戦争の繼續を歓迎する人があるやうである。然しながら

これはよほど考ふべきところであらうと思ふ。元來日本人は簡素の生活を喜ぶ國民であつて戦場に於て兵卒が握り飯と梅干の粗食で以て、よく戦争をやつて行くことが出来るのは、諸外國には例を見ないところであつて、全く日本の長所と云つてよからう。然るに戦争が五六ヶ月位で終るならばともかく五年六年と續いて行くならば必ず國民性に多少の變化を齎すものであつて、獨逸の如きは次第に儉素の生活に向ふやうになり如何なる缺乏にも堪える様になるであらうし、聯合國の方もだん／＼とさうなつて行くにちがひない。かういふ風にして一般に儉素な生活に甘んじてハードウエアをなし得る國民になつたとしたらどうであらうか。折角今まで誇つてをつた日本の長所が盡く向ふに移つてしまふやうなことになるはしないか。その上、日本では金廻りがよいと云つて一般に日常生活に贅澤になつたならば、一年に二億や三億の一時的収入があつたとて洵に取り返しの付かぬやうな始末になりはしないであらうか。かう考へる

と、日本人は一日も早く戦争が歇んで生活の上に大なる變動を及ぼされないことを望むべきである。之は利害關係の方から觀察した點であるが、又之を人道上から見ても同じことと云へやうと思ふ。戦争の繼續が如何に悲惨なものであるかは今更改めて云ふ迄もないことで、われ／＼日本人が此悲惨なる戦争の慘禍に遭はないのは實に幸福であると云はなければならぬ。

(九) 我國の地位の向上に就て

然し一度前に述べたやうなことを顧ると、我々はしつかり禪を締めてうかうかした生活をつゞけるやうなことのないやうにせなければならぬ。極儉素な而して缺乏に堪え得る國民性をます／＼養つて行かなければならぬ。英國が昔眞に苦しんで居つた時代には決して今日の日本のやうな状態ではなかつた。英國は今日の地位を獲るために如何ほどの苦しみを經驗したか。日本人の苦しみ位

は到底比較にはならないのである。我々は飽くまで堅固なる覺悟を以て如何なる困難にも打ち勝つて徐々に日本の地位の高まつて行くことを希望しなくてはならないと思ふ。